して內治を圖り、羅馬法王の十字軍に加はりて埃及を伐ちシリアを恢復せり。察合台汗也先不花は都哇の子なり、元の仁宗に其東疆を侵略せられしかば、西の方呼羅珊を侵し、

察合台汗國の衰微

て合贊の弟鄂勒哲圖の爲に破られて西南邊を掠畧せられ、國勢是より振はず四十年間に十五汗を更へ、シール河南の諸酋長多く獨立し、後遂に帖木兒の爲に滅ぼさる。欽察汗は蒙哥帖木兒より脫々蒙哥を經て脫々に至り、露西亞阿羅思の諸侯王を帥ゐて屢波蘭、匈牙利を劫略し、月即別其後を承け、婚を埃及の哈利發に通じ、同敎の爲に同盟して伊兒汗阿不賽因を伐つ、伊兒汗國是より衰ふ。時にモスカウ太公イヴン一世は叛者を征討して功ありしかば、月即別の親任を得て露西亞の太公となり、後世露西亞帝國勃興の基を開

伊兒汗國の末運

欽察汗國の末運

けり。月即別沒し其子札尼別能く父の遺圖を紹ぎて大に欽察の國威を張りしが、始祖拔都の三兄弟の後裔なる白黨兄幹魯朶の後月即伯弟昔班の後哥里米弟脫哈帖木兒の後の三汗、金黨の正統を爭ひ、各、欽察汗たらんとして弑逆相踵ぎ、二十年間に十五汗を廢立して遂に帖木兒の時に及べり。

元末の亂

明の太祖の創業

第五章　明の初世

太祖の創業　靖難の役　成祖の遠略

元室の分崩するや群雄並び起り、就中浙江には方國珍反し、安徽に郭子興起り、徐壽輝は湖南、湖北を畧し遂に帝と稱して國を天完と號し、張士誠は高郵に據りて周の誠王と號し、海內亂れて麻の如し。郭子興の部將に朱元璋あり、士民の心を得て郭子興に代り其衆を領して金陵江蘇省江寧府に據る。

然るに天完の將陳友諒其主徐壽輝を殺して其土地兵衆を奪ひ、張士誠と通じて朱元璋を謀りしかば、朱元璋先づ發して二人を擊破し、更に南下して方國珍を降し、胡廷端を遣りて福建、兩廣の地を平ぐ。時に元の丞相搠思監は四方の警報を壅塞して姦をなし、皇太子愛猷識里達臘と謀りて御史大夫老的沙を退けしに、大同（山西省大同府）の鎮將孛羅帖木兒、老的沙を容れ兵を起して大都に逼り、搠思監を殺し皇太子を奔らし、自ら丞相となりて權を專にせしかば、河南の主將擴郭帖木兒兵を起して孛羅帖木兒を誅し順帝の相となれり。是より先き朱元璋の將徐達等北進して河北を併せ到る處元軍を破りしが、此に至り四面より大都に逼りしかば順帝遂に上都（内蒙古多論諾爾の北）に奔る。世祖國號を建てより九十八年にして元亡ぶ、時に西紀千三百六十八年（後村上天皇正平二十三年）なり。

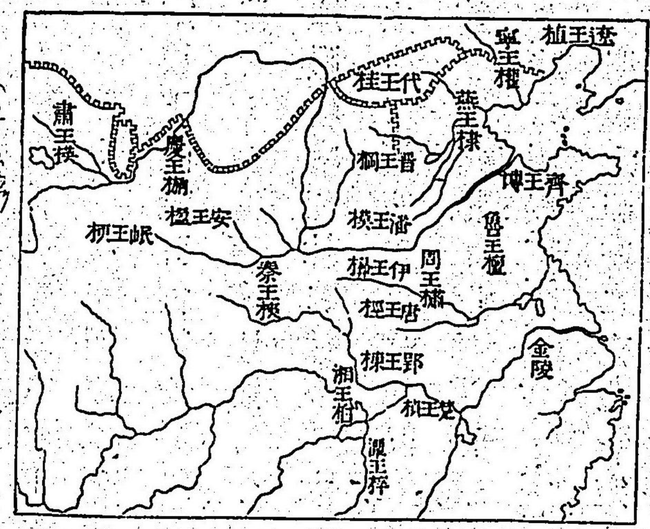
明天下を一統す

是に於て朱元璋帝位に即き支那本部に君臨す、之を明の太祖となす。次で明軍は四川に夏帝明昇を降し、雲南に元の宗族把匝剌瓦爾密を破り、更に進みて大理、金齒等の諸蠻を降せしかば西南境悉く平ぐ。此間元の順帝沒し愛猷識里達臘、喀喇和林に據りて大汗と號し、次で其弟脫古思帖木兒立ちて遼東に入寇せしも、明軍の破る所となりて蒙古の部族全く解散し、明は漠南、滿州を平定して遂に天下を統一せり、時に西紀千三百八十七年なり。

明の太祖の治績

明の太祖既に南北を定め、邊要の地には行都指揮使司を置きて國防を嚴にし、律令を改修して唐代の衣冠を復し、兵權を朝廷に收め、政務を六尚書に分ち、天下に學校を設けて

教化を昌にしぬ。然れども宋、元二朝が郡縣制度を布きて帝室孤立の弊を招きしに懲り、帝は諸子二十四王を鎮要に分封して藩屏となせしにより、邊陲の諸王は征伐の權を擁し、其勢陰然として朝廷と對抗するに至れり。加ふるに太祖は其功臣多く武人にして身後に變を作すを恐れ、胡藍の二大獄を起して其徒數萬人を殺したるを以て、後永樂靖難の役起るや内に一人も惠帝の爲に勤むる者なかりき。惠帝は太祖の孫



胡藍の獄

なり、位に即きて諸王の强大を憂ひ、齊泰、黄子澄と謀りて漢が七國を削平せし例に倣ひ、周、湘、齊、代の諸王を廢せしかば自餘の諸王疑懼自ら安んぜず、時に太祖の子燕王棣は燕京に據りて北邊を鎮し、夙に重望ありて異圖を懷きしが、是に於て元の降卒を招撫し靖難の師を興して南に下り、寧王の衆を併せ大擧して京師を衝く。帝、方孝孺の議を用ひ地を割きて和を請ひしも燕王聽かずして遂に金陵に逼る、時に金陵の宦者多く燕王に通じて、城遂に陷り、帝出奔して行く所を知らず。是に於て燕王帝位に即く之を成祖となす、時に西紀千四百三年なり、成祖都を燕京に遷して北京となし舊都を稱して南京といふ。

初め元室の傾くや安南王陳皙、明に通ぜしが、黎季犛邊功

を立て政權を私し、明の成祖即位の年を以て遂に自立して陳氏に代り、國を太虞と號す。時に陳氏の裔天平、國難を老槐に避け明に入りて哀訴せしかば成祖之を安南に納れんとせしに、途上黎季犛に要殺せらる。成祖、大に怒り張輔に大兵を授けて南征せしめ、安南の軍を富浪江紅河畔に破り黎季犛父子を擒にし、安南を平げて交趾布政司を置きしかば、占城、老槐皆風を望みて明に内附するに至れり。曩に金陵の陷るや惠帝の終る所明ならざるを以て、成祖或は其海外に遁れたるを疑ひ、鄭和に水師四萬を與へて南海諸國を征せしめしが、安南陷るに及んで諸國皆明威に服し、入朝來貢する者琉球、眞臘、暹羅、滿剌加、渤泥、蘇門答剌、瓜哇、榜葛剌等以下三十餘國に及べり。時に元の成吉思汗の弟搠只の後裔

鄭和南海諸國を征す

成祖の北伐

阿魯台は順帝の後、本雅失里を蒙古部に迎へ立て韃靼可汗と爲し、明の招諭に應ぜざりしかば、成祖、邱福を遣はし之を臚朐河畔に擊ちて利あらず、遂に親ら五十萬の大軍を起して北征し、本雅失里を斡難河上に破る。此時外蒙古の西部及天山北路を占領せる瓦剌即ち斡亦剌部の部長馬哈木此機に乘じて本雅失里を殺し、其子答里巴を擁立して權勢を專にせしかば、阿魯台、韃靼の餘衆を率ゐて遂に明に降れり。是に於て馬哈木、漠北を一統して更に明に入寇せんとせしかば、成祖、阿魯台と共に擊破して之を降せり。韃靼、瓦剌是より仇敵となり、後馬哈木の子脫歡、瓦剌の部長となるに及んで連りに韃靼を破り阿魯台を殺せしかば、其部下は東の方、興安嶺の麓に移りて科爾沁部を建て、自餘の韃靼部は悉く

脫歡に降れり、時に西紀千四百三十六年なり。

第六章　帖木兒大王の兼併

帖木兒の勃興

元朝が東方に衰微すると同時に察合台、伊兒汗、欽察三汗國も亦其勢力を西方に失ふに至りしが、帖木兒の察合台國に出づるに及んで蒙古大帝國の再興を見るに至れり。

帖木兒は蒙古の疎族なり、西紀千三百三十五年（元の順帝至元元年）、を以て撒麻耳干（サマルカンド）の一寒村に生れ長じて柯提（ケシク）附近の酋長となる。西紀千三百五十九年察合台の後裔トグルク汗位を占めて中央亞細亞の叛者を征服するや帖木兒其旗下に屬し、次でトグルクの東歸に及んで其子エリアスの參謀となり、中央亞細亞を鎭せしが議合はずして去り、兵を花剌子模（ホラズム）に募りエリアスを擊ちしに、適トグルク死してエリアス東歸するに乘じ、中央亞細亞を占領して都を撒麻耳干に奠む、時に西紀千三百六十九年なり。帖木兒はもと深く成吉思汗の偉圖を慕ひ世界を一統せんと欲し、東の方、葱嶺を踰ゆて婚

帖木兒

を喀什噶爾汗に通じ、遂に察合台汗國を定め、西に還りて花剌子模を擊破し更に伊兒汗國に向ふ。是より先き旭烈兀の遠孫アウイスは八吉打（バグダット）に據り、一たび呼きし呼羅珊を恢復せしも、其子アメッド暴虐にして民心を失ひしかば、帖木兒此機に乘じ呼羅珊に侵入して波斯を

襲ひ、遂に全く伊兒汗の領土を併せたり。時に欽察汗國は拔都の後裔たる金黨汗の血統斷絶して白黨、月即伯、哥里米の三汗、正統を爭ひ紛擾止む時なかりしかば、帖木兒、哥里米汗トクタミッシュを援け立て欽察汗と爲す。然も露西亞の諸侯は欽察汗國の衰亂を機とし、各、獨立を圖りて復汗の約束を奉ぜざりしかば、トクタミッシュ已に欽察汗國を一統するに及んで露西亞に侵入し、モスカウを燒きて諸侯を威服し、餘勢を驅りて花剌子模に侵入す。帖木兒其背德を怒り西紀千三百九十年自兵を率ゐて札牙黑河を渡り、欽察軍を亦的勒河畔に擊破し、北ぐるを追うて露西亞に入りモスカウを掠略し、遂に察欽汗國を平げ、白黨汗ウルスの子コイリザアックを金黨汗の後となして其地を治めしめ、更に

帖木兒欽察汗國を定む

帖木兒以前印度の形勢

帖木兒印度を征す

兵を轉じて南の方、印度に向へり。

是より先き印度はクタブウッヂンが建設せしデリーの奴隷王朝、成吉思汗の西征以後屢、蒙古兵の劫掠を受けて衰微し、西紀千二百九十年ゴール家の疎族ヂエラル、ウッヂン之を滅し、其子アラー、ウッヂンに至り雄資大略ありて殆ど全印度を統一するの勢ありしが、其沒するや版圖一時に分裂せり。次でアラー、ウッヂンの部將ギアスウッヂン內亂を鎭めてトグラック王家を興せしも、其子ムハメッドに至り屢、波斯、支那に遠征を企て成らず、府庫缺乏して叛亂相踵ぎ、西紀千三百四十七年其部將ザアファール、ヒンドヤ山南の地に獨立してバーマニ王家を創むるに及んでトグラック王家の勢威全く地に墜つ。是に於て帖木兒、欽察に勝つの勢を以て此衰亂に乘

帖木兒の西征

し、印度河を渡りて其地を襲ひ、西紀千三百九十九年遂にデリーを陷れて奪掠を恣にせり。初め成吉思汗の西征するや、中央亞細亞の突厥種は其鋭鋒を避けて西に遁れ、部長オスマンは小亞細亞を經略してアドリアノープルにオトマン土耳古帝國の基を定め、其子バヤゼット嗣ぎ立ちて希臘を征し、大に東羅馬帝國を侵略して地を西に擴め、更に埃及の算端と通じ帖木兒を夾擊して東方を經營せんとす。帖木兒時に南征して印度に在りしが、此報を得て急に軍を班へし、シリアを襲ひて埃及兵を破り、バヤゼットを小亞細亞のアンゴラに擒にして悉く其地を定む、時に西紀千四百四年なり。是に至りて帖木兒は蒙古の恢復と回教の傳播とを名となし、大に東征の師を興し、進みて明を滅ぼし世界統一の大業を成さんとす。明の成祖之を聞きて大に驚き宋晟に命じて西方を警戒せしめしが、帖木兒は僅にシール河を渡り疾を獲て西紀千四百五年訛打兒に沒す時に年七十。帖木兒の沒後子孫位を爭うて領土分崩せしが、西紀千四百八年末子沙合魯、内亂を平定して中央亞細亞に君臨せり。

帖木兒の殂落

第七章　明の中世

土木の變　大禮の議　俺答の寇

瓦剌部長脫歡已に韃靼を降し、元の後脫脫不花を立て可汗となし、自ら相となりて權勢を專にし、其子也先勇畧に富み瓦剌の勢力强大に赴く。是より先き滿州吉林地方の通古斯族に兀良哈部あり、成祖を助けて惠帝と戰ふの功により地を大寧附近に得て漸く大なりしが、是に至り瓦剌部に降

りしを以て也先、其衆を併せて南に下り遂に明に入寇せり。明の英宗之を聞き宦者王振の言に從ひ親ら軍を督して北征し、大に瓦剌の兵と土木（直隸省宣化府）に戰ひ破れて帝は生擒せられ、瓦剌の兵直に進みて北京に逼りしかば、城中震駭して南遷を言ふものありしも、于謙等英宗の弟景帝を擁立し固く守りて下らず、瓦剌遂に圍を解きて退き好を通じ英宗を送還す。英宗還るに及んで景帝と相和せざりしが景帝沒するや石亨、宦者曹吉祥と謀り英宗を重祚せしむ。然も是より宦者擁立の功を負うて威福を擅にし、憲宗を經て孝宗、武宗の世に及び明室漸く衰へたり。

武宗沒して嗣なく、楊廷和、遺詔を奉じて孝宗の弟興獻王の子厚熜を迎立す、之を世宗となす。時に尚書毛澄は楊廷

和の意を受け漢、宋の故事により、孝宗を皇考と曰ひ、興獻王を皇叔父と曰ひ、自ら姪皇帝と稱せんことを帝に請ひて却けられしかば、廷臣已むを得ずして孝宗を皇考と爲し、興獻王を本生皇考興獻帝と爲し其妃を本生皇太后と爲さんと請ふ。已にして桂萼は孝宗を皇伯考と云ひ興獻王を皇考と云はんと請ひ、張璁は本生の稱を去るべしと謂ひ、之より廷臣の論爭久しく續きしが、遂に席書等の議により孝宗を皇伯考と稱し其皇后を皇伯母と稱し、興獻王を皇考と稱し其妃を聖母と稱し武宗を皇兄と稱し其皇后を皇嫂と稱するに決し、詔して天下に告げ尊稱遂に定まれり、之を大禮の儀といふ。

土木の變後瓦剌の也先は脫々不花を弑し自ら大元天聖可

達延可汗

俺答の寇

汗と稱して驕暴を逞うせしが、遂に重臣の爲に弑せられしかば韃靼の部長孛來は毛里駭と謀りて、脫々不花の子麻里可兒を擁立せしも、二人權を爭うて相攻伐せしより瓦剌及韃靼の勢大に振はざりしが、後達延可汗出づるに及んで雄力あり、韃靼の諸部を統一して大元可汗と號し、明室の衰ふるに乘じ南下して西紀千五百一年寧夏を陷れたり。達延の時漠北蒙古に末子札賚爾を封じ、漠南蒙古の東半は嫡孫卜赤に與へて可汗たらしめ、其西半は二子巴爾色に與へて吉囊副王の義たらしむ。次で巴爾色の子究弼哩克は河套に居、りて鄂爾多斯部の始祖となり、其弟俺答は陰山に據りて土默特部の祖となり、西紀千五百三十一年以後鋒を聯ねて頻に明の邊境を侵せり。已にして究弼哩克沒し俺答之に代り、西紀千五百四十二年を以て從孫黃台土と共に大舉して入寇し、人を斬ること二十萬、牛馬を奪ふこと二百萬、剽畧掠奪を擅にして去る。是より後漠南蒙古の諸部を誘うて屢山西、直隸の地を侵掠し、明室の威微弱なるに乘じて强暴を擅にするもの前後二十餘年に亙りしが、俺答亦瓦剌を破り吐蕃を降し西の方青海を略するや、漸く喇嘛教を尊信して殺戮を厭ふに至り、遂に明に和したり。西紀千五百八十二年俺答沒し黃台土之に代りて吉囊となりしが、亦深く喇嘛教を尊信して明に入寇すること稀なりき。

交趾の叛服

第九章　交趾の叛服　沿海の寇盜

始め明の成祖安南を征服して交趾布政司を置き、水師を

大越

派遣して海南諸國を威服せしが、其末年に黎利なる者安南人を煽動して亂を作し、西紀千四百二十九年に至り明の宣宗の許を得て陳氏の後を立て國王となし、幾ならずして自明の封冊を請ひ安南王となりて國を大越と號せり。黎利の孫黎灝の世に及び占城を滅ぼし老撾を降して國威大に張りしも、其沒後內亂起りしかば莫登庸なる者之を鎭定して勢を得、西紀千五百二十八年（明世宗嘉靖七年、後奈良天皇享祿元年）に至りて遂に王位を簒へり。是に於て阮淦なる者黎氏の後を奉じて淸華州に據り莫氏と對峙すること六十五年にして、黎氏の將鄭松遂に莫氏を滅ぼして安南を統一せり。然るに阮淦の子阮潢は鄭松の功を恃みて專橫なるを惡み、順化府に據り國を廣南と號して鄭松を圖り、之に對して鄭松は黎氏

大越と廣南

を挾んで交都に據るに及び安南は再び大越、廣南の二部に、分れたり。

明の太祖の天下を統一するや、元の宗族を雲南に下して大理、金齒の諸蠻を服せしが、宣宗の世に及び麓川の部長思任叛きて金齒以下の諸部を併呑せしかば、宣宗の子英宗の時王驥等を遣はして南征し、思任を追うて緬甸に入り之を擒にせり。後雲南に孟養部あり、其部長は思任の裔なりしを以て、緬甸が明に應じて思任を捕へたるを怨み之を侵して國都阿瓦を陷れしかば、緬甸の王族莽瑞體は洞吾に奔り其地の酋長となれり。時に喜望峯の航路開けて葡萄牙人の印度に至る者多し、莽瑞體之を傭うて頻に四方を攻伐し、遂に西紀千五百五十四年（明世宗嘉靖三十三年、後奈良天皇天文二十三年）を以て

阿瓦を恢復して緬甸王となり、金沙江（イラワディ河）を溯りて雲南の諸蠻を下し、暹羅を破りて明の南徼を侵す。「暹羅の地は、もと暹と羅斟との二部に分れしが、元末孛羅達怡菩提始めて二部を統一して暹羅國を建て都を猶地亞に定めしが、是に至りて緬甸の破る所となれり。西紀千五百八十三年緬甸王莽瑞體の子莽應裡大軍を帥ゐて雲南に入寇せしに、明將劉綎擊ちて之を破り更に南進して阿瓦を陷れ、暹羅も亦此機に乘じて其東邊を畧せしかば、緬甸是より漸く衰ふ。

暹羅

弘安の役後我國人の對外の氣大に振ひしに、五十餘年にして國内は南北兩朝に分れ、爭亂相踵ぎ財用缺亡せしかば諸國の豪族元及高麗に通商の利を求むる者多し。既にして元室の衰ふるや、我南朝も亦漸く微にして其遺臣西陲の

元高麗の倭寇

流民と共に元及高麗の沿海を剽掠せしが、明初に及びては元末の諸雄張士誠、方國珍等の殘黨皆我寇民と結びて海上に出沒し、北は山東より南は浙江、福建に至るまで歳こして其害を蒙らざる者なきに至りしかば、明の太祖使を我邦に遣はして邊寇を禁ぜんことを請ひしも功なく、防倭衛所を邊要に設けて專盜寇に備ふ。成祖の世に至り我南北朝は一統に歸し、足利義滿、使を明に遣はして隣交を修めしより我邦の諸侯も亦足利氏と共に各自明に通じ、其勘合符を受けて貿易に從事せしが、幾もなくして應仁の大亂起りて我邦は戰國擾亂の世となり、四方不逞の徒、身を商賈に投じ言を貿易に假りて頻りに海外に向ひしに、明の奸商等は官吏と結びて我商民を詐き、其物品を購うて其値を償はざりしか

日明の交通

明の倭寇

ば憤怨して復其沿岸を剽掠するに至れり。是より我貿易の商民は變じて沿海の寇盜となり、其徒多きは一萬、少きも數千、海上に浮びて貿易の利を求め、利なければ即州縣を侵略して人を殺し火を放ち剽掠至らざるなし、明人之を倭寇と稱し畏怖遁竄能く禦ぐ能はず。是に於て明の臣民にして志を當時に得ざる者皆此寇民に投じ、其援助を得て沿海の地を攻略せしかば倭寇の勢益猖獗を極めしが、西紀千五百六十三年（明世宗嘉靖四十二年、正親町天皇永祿六年）倭寇平、海衛（福建省興化府）を陷れて明將俞大猷等に擊斥されしより其勢漸く微なりしも、猶臺灣島を根據として明の南海岸に出沒せり。倭寇の沿海の患を爲せしより明人深く我邦を怨みしかば、遂に萬曆年間征韓の役起るや明は朝鮮を援けて我と干戈を交ゆるに至りき。

高麗の末運

朝鮮の建國

第九章　明の末世

萬曆朝鮮の役　東林の獄　流賊

高麗は元の東征に加はりしより財政紊亂して國力疲弊せしに、恭愍王位に即きて內は僧遍照に信任して政法亂れ、外は倭寇の侵害を蒙りて國勢益振はず、加ふるに王沒して嗣なく遍照の子辛禑遺命によりて其位を承け、明の太祖の封册を與へざるを怒りて明に入寇せしが、其將李成桂諸將と謀りて之を廢し恭讓王を迎立せしも、民心王に服せずして李成桂に歸せり。是に於て李成桂は西紀千三百九十二年（明太祖洪武二十五年、後龜山天皇元中九年）王位に即きて國號を朝鮮と改め、明の太祖の封册を受けて其外藩となる、之を朝鮮の太祖となす。

萬曆朝鮮の役

朝鮮の太祖八世の孫宣祖李昭の世に及び、我邦は豐臣秀吉、織田氏の遺圖により國内を統一し、朝鮮を介して明を征せんとせしに宣祖命を拒みて從はず。秀吉より先づ朝鮮征伐の師を興し、西紀千五百九十二年我兵朝鮮に入り加藤清正、小西行長等連に諸城を下し、京城、平壤相次で陷りしかば宣祖、義州に奔り救を明に求む。時に明は神宗の萬曆年間なりしが、遼陽の總兵祉承訓を遣はして朝鮮を救ひしも祖承訓、平壤に至りて敗れしかば、明は更に李如松を遣りしに亦碧蹄館（京畿道京城北）に大敗せり。神宗遂に沈惟敬を使こし和を講ぜしめしが、秀吉其璽書禮なく條約一致せざるを以て之を斥け、再び朝鮮を征し明師を破りしも交戰歲餘にして秀吉病んで沒し我諸將引き還りしかば、宣祖漸く京城に歸るを得たり、實に西紀千五百九十八年（明神宗萬曆二十六年、後陽成天皇慶長三年）なり。

東林の黨

明は太祖以來力めて言論の自由を許せしを以て、英宗以後朝政の亂るゝや學者其得失を論ずる者漸く多し。神宗の朝顧憲成、學識を以て天下に名あり、神宗が鄭貴妃を寵して其所生の幼兒を立てんとするを諫め、罷められて鄉に歸り東林書院を修め講學に托して時政を刺議す。時に鄒元標、趙南星も亦志を得ずして去り、徒を集めて學を講じ憲成に聲援して朝政を可否せしかば、在野の學者多く之に附和せり。在朝の當局者は此徒を目して東林黨と稱して之を排斥せしが、適狂人、太子の門者を挺擊せるあり、次で神宗の子光宗は紅丸を服して俄に沒し其寵妃李選侍、熹宗を擁立

三案

流賊

せしに、朝臣等李選侍の遂に國政に干渉するを恐れて之を他宮に移しぬ、之を挺擊、紅丸、移宮の三案といひ、東林、非東林の二黨互に相非議せり。時に東林黨の葉向高、相となり其黨を任用して勢盛なりしかば、非東林黨は熹宗の乳母客氏に通ぜる宦者魏忠賢に賴りて悉く東林黨を排除せしが、是より魏忠賢事を擅にして明室大に亂れ、內憂外患其隙に乘じて並び起れり。

神宗、朝鮮を援けて兵を我邦と構へしより國用足らずして頻に富國の策を求め、奸吏之に乘じて鹽、茶、船舶の稅を增加し、重賦厚歛貨財を貪りて士民の困弊を顧みざりしかば、天下遂に亂を思ふに至れり。是に於て西紀千六百二十八年年穀稔らざるに乘じ、李自成、張獻忠等兵を陝西に起すに及び四方の流賊之に響應して興る。然も明は成祖、篡奪の後諸王の兵力を殺ぎしかば藩鎭の權輕く、加ふるに當時邊陲事多くして國內の武備足らざるを以て流賊の勢益猖獗を極め、張獻忠は四川を畧し、李自成は陝西、河南を定め山西を取りて遂に北京を陷れしかば、思宗は自殺し李自成帝と稱す、實に西紀千六百四十四年（後光明天皇正保元年）なり、明は二百七十七年にして亡ぶ。

北京陷り明滅ぶ

遼金の文藝

第十章　元明の儒學文藝

初め遼、北方に起り後晉の圖書を收めて稍中國の文化を傳へ、金の起るや遼の文物を採用し次で宋を伐ちて其文學を傳ふ。馬定國、宇文虛中等は金の文壇の先輩たりしも、太〻

原の人元好問遺山出つるに及び詩文を以て名海内に鳴るもの三十年金亡びて後仕へず野史亭を構へて金の遺事百餘萬言を著錄す、其詩の悲壯なるは國家覆亡の感深きによれり。

元の文藝

元は金宋の文學を傳承したるも蒙古文字を使用したるが爲め其傳播遲く、且國運甚短かりしを以て充分の發達を爲すに及ばざりき。宋の宗族にして元に仕へし趙孟頫子昂は書畫文章經濟を兼ね善くして元代文學の氣運を開き虞集（ぐしつ）は學問洽博一代の文宗にして楊載、范椁、揭傒斯は虞集と併せて四大家と稱せられ、殊に揭傒斯は遼金宋史編修の總裁たりき。四家と前後して流麗の詞に工なりしものを馬祖常、薩都剌の二人となす、元末に至りて楊維楨あり詩を以て著はる。

元の儒學

儒學の大家は北に許衡あり篤實にして講學を好み、南に吳澄ありて詞華儒學に兼通して著書多し、彼の文人虞集は實に其門下より出でたるなり。此他金、履祥は、仁山に居りて仁山先生と稱せられ、劉因は靜脩と號し講學文章を兼ねて北宋以來第一と稱せらる。

宋以後の科學

宋以前は士を取るに詩賦を以てせしが、宋に至り經義を以て試驗登用することを起りしかば、苛くも出世榮達を希望する者は皆力を經義の穿鑿に用ゐて受驗用の八股文を學べり、從つて眞正の儒術、古來の文辭は與に盛なる能はざりき。

明の儒學

明興りて、薛瑄、吳與弼等は儒を以て大政に參與せしも徒に先儒の陳說を奉ずるのみ、後陳獻章の江門の學起り、次いで王守仁陽明の姚江の學流を揚めて朱子の說に反對してより門徒漸く天下に偏く、明の中世以後は殆ど程朱の說を固

守する者無きに至りしも、要するに性命理氣の議論に過ぎざりしかば、當時の論者は之を評して科學盛にして儒術微なりといへり。明代の文章は宋濂（景濂）を明初第一と爲し、王禕（子充）之に亞ぎ、宋濂の門より出でし方孝孺は氣慨の士にして文亦氣魄光燄あり、楊子奇は簡淡和易の文を作りて臺閣體の祖と稱せられ、王陽明は儒者なれども文章を善くし、歸有光（震川）は明代文辭の中堅たりき。明代の詩は宋元時代と異にして寧ろ唐詩に近く、創業の功臣劉基（伯溫）は沈着頓宕の作ありしも、高啓（青邱）の博學にして詩賦に工なるに如かず、高啓の詩一千餘篇皆金玉の響あり、永樂（成祖）以後には李東陽、李夢陽、陽慎ありて皆著はる、李攀龍、王世貞に至りては唯に盛唐の風潮を學べるのみにして摸擬剽竊に過ぎざりき。

帖木兒後の中央亞細亞

第十一章　莫臥兒帝國の興亡

帖木兒大王の沒後其末子沙合魯（シアハールク）、哈烈（ラット）より起りて一時中央亞細亞を平定せしが、其子ウルグベックの時に至り國內復亂れしかば、拔都の弟昔班（シバン）の後裔なる月即別汗アブルケル、帖木兒の玄孫アブセイドを助けて國難を靖んじ、復中央亞細亞に君臨せしむ、時に西紀千四百五十二年なり。然るにアブセイドの沒後其領土復分裂し、帖木兒の後裔各一方に割據して相攻伐せるに乘じ、アブルケルの孫シバン頻に南に下り、西紀千五百年遂に中央亞細亞を占領せり。時に波斯の回教の高僧シアー、イスマエルなる者國人の歸服を得てサフイー王家を興し、西紀千五百二年遂に波斯を一統せし

バベール印度を侵略す

かば、アブセイドの孫バベール其後援を得て亞富汗より興り、シバンを逐うて一時中央亞細亞を恢復せしも、再びシバンの奪ふ所となりしを以て、バベールは遂に意を中央亞細亞に絶ち退いて印度を圖れり。

是より先き印度はドクラク王家の威令地に墜ちて國内亂れたるに乘じ、西紀千四百五十年亞富汗人ビロル、ロッヂなる者代りて路提王家を建てしも、ラヂアプト種族尚四方に割據して之と攻爭せしかば、バベールは屢可不里より印度を侵し、西紀千五百二十八年（明世宗嘉靖七年、後奈良天皇永祿元年）大擧南下して路提王をパニパッドに擊破し、遂にデリーを陷れて路提王家を滅ぼし、更にラヂアプト種族と戰てムルタン、ピハルの地を定め、アム河よりガンジス河下流に至る大版圖を開けり。

アクバル大帝

然るにバベールの沒後國内大に亂れ、其子フマユンは波斯に出奔しサフィー王家の援兵を得て阿富汗、巴達克山地方を恢復し再び印度に還りしが、幾ならずして沒し其子アクバール嗣ぐ。アクバールは天資英邁にして雄略あり、悉く北、中兩印度を征服して都をアグラに奠め、封建の制を立て田租の法を改め、非回教徒稅を廢して溫都教徒の心を結び、其版圖アム河よりヒンドヤ山に及べる莫臥兒帝國を創建せしかば、後人其功德を尊びて大帝といへり。然れどもヒンドヤ山南の地は未だアクバールに服せずして、バーマニ王家より分れし五回教國と溫都教を奉ぜるザヂナガル國とあり、就中アマヅナガル回教國は最强大にして諸回教國を連合し、南はザヂナガルを擊ち北は屢、アクバール及其子ヂハ

シギールを破る。次でアクバールの孫シアヂハン、曾孫アウラングゼブの兩帝相次で力を南方の經略に用ゐ、遂に諸回教國を降してヒンドヤ山南の地を收めしも、波斯王アバッスはシアヂハンが南征の虛に乘じて印度河外の地を侵略し、溫都教徒はアウラングゼブの回教を崇奉して溫都教徒を用ゐざるを憤り、南印度にマーラータ同盟を結びて二十年間の抵抗をなせり。西紀千七百七年アウラングゼブ沒して後は庸暗の主位に在りて、北は波斯の侵略を被り南はマーラータ同盟にヒンドヤ山南を蹂躙せられ、莫臥兒帝國漸く衰ふ。

莫臥兒帝國の衰運

是より先き波斯のサフィー王家も亦漸く衰微せしかば、阿富汗人ミルヴイスはアウラングゼブの沒したる翌年を以て乾陀羅（カンダハル）に叛し、其子マームッドに及びイスファハンに入りて波斯王となりしが、後幾ならずして波斯人ナヂル起り頻りに阿富汗人を破り、イスファハンを恢復して波斯王となり、勢に乘じて巴達克山より阿富汗斯坦に入り、乾陀羅、可不里を降して莫臥兒帝國を侵す。莫臥兒帝ムハメッド、シアヂを防ぐこと能はず西紀千七百三十八年婚を通じて和を媾じ、是より莫臥兒帝國の勢愈〻微にして英吉利人の印度經略は盛に起れり。

波斯王印度を侵す

第十二章　葡萄牙西班牙の東略　天主教の東流

蒙古が亞細亞、歐羅巴兩大陸に跨る大版圖を有してより

東洋に於ける葡萄牙人

東西の交通頻繁こなり、以太利人マルコ、ポーローの如き歐洲人の東遊せし者歸りて支那、印度地方の富庶、日本の金銀珠玉に富めるを說きしかば、歐洲人の東洋に來往する者漸く多くして、印度の路提王朝の中葉、葡萄牙人ヴスコ、ダ、ガマ

マルコ・ポーロー

國王の命を奉じて喜望峯を周航し、新航路によりて西紀千四百九十七年（明孝宗弘治十年、後土御門天皇明應六年）始めて印度の馬拉巴爾に達せしより、葡萄牙人の東洋に至るもの多く、數年にして印度の地を占領して太守を置き、西紀千五百十五年には臥亞を取りて根據地こなし、次で滿剌加、瓜哇を奪ひ暹羅と交易を開けり。是より先き明の成祖、南洋を經略せしより支那人の南海諸國に通商する者多かりしかば、葡萄牙人は之と結びて支那海に入り廣東に着し、寧波、厦門に商館を設け、西紀千五百六十三年には澳門を略取し遂に我邦に至れり。ヴスコ、ダ、ガマが東洋遠航をなせる間に、西班牙王は葡萄牙人マゼランをして太平洋に西航の新路を求めて東洋に達せしめ、次でレ、ガスピーを遣して西紀千五百二十五年（明世宗嘉靖四年、後柏原天皇大永五年）比律賓群島を占領し、馬尼剌市を建搬して盛に東洋貿易を起せり。然れども葡萄牙人は先づ東洋に達したるを以て、其後百餘年間は殆ど東洋貿易の利を壟斷し、西班牙人の支那貿易の如きは平戸、馬尼剌に限られたりき。其後和蘭が宗教の爭を以て西班牙

西班牙人の東航

より獨立して東洋貿易を始むるに及びては、葡萄牙、西班牙の商民之が爲に忽ち壓倒せられたり。

元の基督教

唐の太宗の世太秦より景教を傳へしも、後幾もなくして衰へ基督教は一時其迹を東洋に絶ちしが、元に至り東西の交通頻繁を加ふるに從ひ基督教徒の東方に宣教を企つる者多く、西紀千二百四十五年羅馬法王インノセント四世はプラノ、カルピニを元の定宗の王庭に派遣し、次で西紀千二百五十三年佛蘭西王ルイ九世も亦使僧ルブルックをして元の憲宗を喀喇和林に訪はしめたりき。元の諸帝亦其徒を任用し、世祖の如きは西紀千二百九十四年フランシスコ派の僧モントコルビノを優遇して布教建寺を許し、十一年間に六千人の信徒を出せり。明初に及び禁令ありて基督教

明に於ける天主教

暫く中絶せしが、歐洲に新舊兩教の爭起りしより堅忍不拔の耶蘇會徒は、新教徒の爲に西土に失ひし勢力を東洋に得んと欲し、海上の新航路開くると共に陸續として東に向ひ、西紀千五百年（明孝宗弘治十三年、後土御門天皇明應九年）天主教徒始めて印度に來り、後四十年にして臥亞を根據として傳道を力む。此際耶蘇會派のフランシス、ザビエル（方濟各）は西紀千五百四十二年臥亞に來り、後六年にして支那を經て我平戸に至り、進みて中國、京都に福音を傳へ、後同派のミケール、ローザアは西紀千六百一年に、マテオ、リシ（利瑪竇）は其翌年に法王の命を奉じて相次で支那に至り、殊にマテオ、リシは神宗の崇敬を受けて宣教に從事し北京にマリア會堂を建つ。マテオ、リシの沒後ロンゴバルヂ（龍華民）アダム、シャール（湯若望）等其遺業を紹

清初の天主教

き、何れも皆曆算、天文、砲術等を以て明廷に信任せらる。明亡び清代るに及びても其徒亦寵用せられ、アダム、シャールは世祖の欽天監となり、フェルビースト（南懷仁）も亦聖祖（康熙帝）に親任せらるゝに至れり。是に於て南支那に渡來せる他派の舊教徒は耶蘇會派の隆昌を嫉み、羅馬法王に訴へて其布教の方法を非難せしかば、西紀千七百四年法王クレメント十一世は耶蘇會徒を譴責せしも、聖祖は反つて之を保護し他派の基督教徒に退去を命ぜり。然るに世宗（雍正帝）立つに及びて天主教嚴禁の令を下せしかば、基督教の傳播は此に一頓挫を來しぬ、時に西紀千七百二十四年（清世宗雍正二年、中御門天皇享保九年）にして我邦の天主教も亦是より八十餘年前島原の一亂に中絶したりき。

第五編

第一章　清の開國　世祖の一統

金亡びてより後通古斯族は久しく沈淪して復聞ゆる者なかりしに、明の時今の盛京の東北に據れる滿州部より覺羅部出づ。覺羅部は世寧古塔の西南鄂多理に居りしが、明の英宗の頃赫圖阿拉興京に移り、後百數十年にして神宗の萬曆年間努爾哈赤其部長となるや、甲兵百人を以て起り近傍の諸部を統一し、次で通古斯族の扈倫、長白山、科爾沁諸部を降し、西紀千六百十四年（明神宗萬曆四十二年、後水尾天皇慶長十年）遂に國號を建て滿州といひ、皇帝の位に卽く清の太祖是なり。時に扈倫の葉赫部は明、朝鮮の援兵を得て之を伐ちしに、太祖之を渾

清と朝鮮及漠南蒙古との關係

河畔に破り進みて瀋陽（奉天府）を陷れ都を此に奠む。

西紀千六百二十七年滿州の太祖沒し子太宗位に即く、此年明の思宗も亦位に登り、袁宗煥を擧げて滿州を防がしむ。太宗乃兵を轉じ阿敏を遣りて朝鮮を征し、平壤を陷れ京城に逼りて朝鮮王仁祖を服し、更に兵を進めて明の山海關に逼る。初め俺答の勢を漠南に振ふや韃靼の可汗は僅に挿漢兒部を保ちしが、此時に當り卜赤汗の遠孫林丹汗稍勢威を恢復して屢明に入寇せしかば、明は重幣厚賂を以て之を誘ひ滿州を防がしむ。是より林丹、遼東を侵し亦科爾沁部を攻めしかば、滿州の太宗之を伐ちて林丹を殺し、其子孔果爾を降し傳國璽を得て更に國號を清と改む。時に朝鮮は一たび滿州と和せしも太宗が漠南蒙古と相爭ふに乘じて

清の世祖の一統

復明に通ぜしかば、太宗の蒙古を平定して還るや親軍を督して朝鮮を征し京城を陷る。是に於て朝鮮王仁祖遂に明と絶ちて清の封册を受く、實に西紀千六百三十六年なり。

時に陝西の流賊李自成は遂に北京を陷れて明を滅ぼせしを以て明將吳三桂、清の太宗の子世祖（順治帝）に降り、其援兵を乞うて李自成を破り之を平ぐ。是に於て清遂に北支那を定め國都を北京に遷し、多鐸を遣りて江南を平定せしむ。曩に明の思宗の死するや遺臣等は神宗の孫福王を南京に擁立し、史可法、軍を督して清軍を防ぎしが、多鐸之を破り江を渡て南京を陷れ福王を降せり。時に明の王族尚存して魯王は浙江に、永寧王は江西に、唐王は福建に據りて各帝と稱せしも清軍悉く之を討滅せしかば、明の遺臣等更に神宗

の孫桂王を廣西に擁立せしが、清軍の來り討つに及んで桂王逃れて雲南に入り更に緬甸に奔る。緬甸王ペンダリ之を赭硜に奉じ雲南の諸蠻と協力して清軍を防ぎ、清軍進みて阿瓦に逼りしも、寄寓の葡萄牙人よく防ぎて下らざるを以て兵を引き去れり。然も緬甸の國人は王が明の遺族を納れて災を招くを非とし、王の弟パ、ワラ、ダーム、マ遂に王を弑して國を簒び桂王を捕へて清に致せり、時に清の聖祖康熙帝の康熙元年にして西紀千六百六十二年なり。

第二章　清の聖祖高宗の業

明室已に亡びしも其遺臣餘類尚江南に出沒するを以て、清廷は明の降將吳三桂を雲南に、尚可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて三藩王となし之を鎮壓せしめしが、聖祖已に天下を統一して三藩の强大を憂ひ、竊に之に備へしかば三藩自ら安んぜず、平西王吳三桂先づ叛し、平南王尚之信尚可喜の子、靖南王耿精忠耿繼茂の子之に應ず。

清の聖祖

時に漢族、清の辮髮令を悅ばずして兵を所在に擧げ江南響應せしも、清軍之を伐ちて耿精忠、尚之信等を降し江南を定めしかば吳三桂の勢日に蹙る、後幾ならずして吳三桂病死し其孫吳世璠嗣ぎしも其勢次第に衰へ、西紀千六百八十一年清聖祖康熙二十年に至りて全く平定せり。初め明末に海賊鄭芝龍我長崎に寓して鄭成功を生み、國に歸りて父子共に明に降り

臺灣の平定

しより明の恢復を圖る。後鄭芝龍清に降りしが、鄭成功從はずして魯王を奉じ臺灣に據りて明の正朔を奉ぜしも幾ならずして沒し、其子鄭經は父の遺業を守り次で三藩に應じて沿海を寇掠せしが、鄭經の沒後其子鄭克塽幼弱にして將士服せず、清軍來り攻むるに及んで遂に出て降る、北京陷りてより此に至りて約四十年にして明の遺類始めて盡く。

欽察汗國の末路

是より先き明の中世に當り欽察汗國は白黨、哥里米二汗、爭鬪の結果殆ど分崩し、北に喀山汗あり、西南黑海の沿岸に哥里米汗あり、東南アラル海附近一帶は月即別族之を占領し、東吉利吉思荒原地方は吉利吉思族の據る所となれり。モスカウ大公イヴン三世此機に乘じて露西亞の諸侯を併呑し、次で喀山、哥里米の二汗と同盟して欽察汗アーメッドに

欽察汗國の滅亡

叛きしかば、アーメッドは之を伐つて陣沒し欽察汗國遂に亡ぶ、時に西紀千四百八十年（明憲宗成化十六年、後土御門天皇文明十二年）なり。かくて露西亞は其獨立を恢復せるも、アーメッドの子孫等尚ドン及ウラル兩河の間に大斡兒朶汗國、ヴルガ河の下流に阿斯坦拉汗國を建てイヴンに抗し、イヴンは喀山、哥里米の二汗と同盟して之に當れり。後幾ならずして大斡兒朶汗國亡び、喀山汗及阿斯坦拉汗は哥里米汗と通じてイヴン三世の子ヴシリ四世に抵抗せしが、ヴシリの子イヴン四世の時に及び喀山及阿斯坦拉二汗國を併呑し、更に進んで東方經略の策を講ぜり。時に昔班の後裔庫程、悉畢兒汗と號して現時のトボルスク附近の月即別族に君臨し、屢露西亞の邊境を攻掠せしが、ドン河畔の哥薩克部長エルマルク其部下八

大斡兒朶汗國と阿斯坦拉汗國

悉畢兒汗國

露人の東略起る

百人を率ゐてウラル山を超え行、諸部落を下し、遂に悉畢兒汗を破りて悉く其地を略し之をイヴン四世に獻ず、是實に露人東略の第一着手にして西紀千五百八十年（明神宗萬曆八年、正親町天皇天正八年）なり。ミカエル三世の時益、哥薩克を東方に派遣して經略に從はしめ、城壘を也尼塞（ヤニセイ）及昂可拉（アンガラ）兩河畔に築き次第に此地方のオスチャク族及通古斯諸族を降し、次でボヤルコッフはゼヤ河を下りて黑龍江を探りオコック海に達し、ハバロッフは黑龍江邊の部族を攘ひて烏蘇里江に達し、還りて雅克薩（ヤクサ）に城きしが、時に清は新に興りて南方の經畧に忙はしく北顧の暇あらざりしかば之と拮抗する能はず、滿州地方の清兵は屢、哥薩克の破る所となれり。

清の聖祖已に南方を平定するに及んで北の方哥薩克を攘はんと欲し、嫩江の沿岸墨爾根（ムルケン）及齊々哈爾（チチハル）に鎮兵を增加し、西紀千六百八十五年（清聖祖康熙二十四年）彭春に水陸の兵一萬五千を授け、雅克薩城を攻めて之を陷れしめしが、幾ならずして哥薩克の將トブルジン殘兵を率ゐ來り再雅克薩に據りしかば、聖祖は薩布素に命じて復之を伐たしめ、一方には和蘭人を介して書を露西亞に送り邊境を定めんことを求む。

露清の交渉起る

尼布楚の條約

是に於て露西亞帝ペートル一世は公使ゴロヴィン（費耀多羅）を遣はし、清使索額圖と色楞迦（セレンガ）河畔に會約せしめしに適、準噶爾（ジュンガル）部に爭亂ありしかば、二國の使節亂を避けて什爾哈河（黑龍江の上流）の中流尼布楚（ネルチンスク）に會し、露西亞は悉く外興安嶺以南の侵地を返還し格爾必齊（黑龍江の上流）河を以て兩國の界となす、時に西紀千六百八十九年（清聖祖康熙二十八年）なり。聖祖よりて新に黑龍

江沿岸に屯田兵を置き露人の南下を扼し、專力を西北方面に用ゆ。

準噶爾部

衛拉部即明代の瓦剌部は也先の死後久しく振はざりし、が、其遺族伊犁に居るを準噶爾部といひ、清の聖祖の初年其部長噶爾丹なる者ありて青海、圖伯特を服し、天山南路を併せ進んで外蒙古の喀爾喀部を襲ふに至り遂に清との衝突起る。喀爾喀部は韃靼の達延可汗の末子札賚爾の封地にして、當時札薩克圖汗、土謝圖汗、車臣汗の分領する所なりしかば、噶爾丹來り伐つに及び三汗東に奔り途に清使索額圖に遇ひ援を清に請ふ。聖祖、噶爾丹に諭して兵を收め侵地を還さしめんとせしも聽かず、反つて長驅して內蒙古の東部に逼りしかば、聖祖乃親征して西紀千六百九十六年清聖祖康熙三十五年大に之を昭莫多土拉河南に破る。噶爾丹の姪策妄阿拉布坦武略あり、曩に噶爾丹を怨み巴爾噶斯湖畔に遁れしが此機に乘じ伊犁を取りて清に通ぜしかば、噶爾丹腹背敵を受けて進退倚る所を失ひ毒を仰ぎて自殺す。是に於て聖祖軍を還へし策妄阿拉布坦、衛拉の四部を併せしが、後策妄阿拉布坦、圖伯特の紛擾を機とし西紀千七百十七年大擧して拉撒を襲ひ拉藏汗を殺せしかば、聖祖皇子允禵を遣りて圖伯特を復せり。西紀千七百二十二年聖祖沒し世宗雍正帝繼ぎ、屢兵を出して準噶爾を征すること前後六年に亙りしも清軍多くは敗退して降すこと能はず、策妄阿拉布坦の子噶爾丹策零屢邊境に入寇す。高宗乾隆帝の立つに及び噶爾丹策零已に死し、策妄阿拉布坦の從孫達瓦齊位にありて其

世宗高宗の西北經略

族阿睦爾撒納が擁立の功を負うて驕暴なるを惡み之を逐ひしかば、阿睦爾撒納、清に奔る。高宗、班定を遣りて達瓦齊を伐ち準噶爾を定めしに、阿睦爾撒納其部長たらんと請ひて許されざるを怨み兵を天山北路に擧げ、天山南路の回教白山派の布羅尼特等和卓を率ゐてこれに應じ勢頗る猖獗なり。高宗、兆惠等を遣り先づ阿睦爾撒納を殺して天山北路を定め、次で喀什噶爾、葉爾羌を降して天山南路を平げ、清威を葱嶺以西に振へり。

高宗の西南經略

清の力を西北方に盡くせる間に、貴州南部の苗蠻亂を成し大小金川（四川の西部打箭附近）の僻險に據りしが、清將張廣泗、阿桂等漸次之を討平しぬ。緬甸はベンダリの後國威振はずして國都阿瓦は白古に陷れられしに、木疏（阿瓦の北方）の部長甕籍

牙之に抗して阿瓦を復し、次で白古を征し阿撒母を降して屢雲南の邊陲を擾す。高宗、明瑞を遣はして之を伐たしめしも明瑞陣沒せしかば、更に傅恒をして水陸より阿瓦に逼らしめしに、甕籍牙の子孟駁恐れて和を請へり。

緬甸

暹羅

暹羅は明末に當りパラチョー、ソンタム王位にあり、我邦人山田長政を用ゐて我に通じ、亦近隣の諸國と戰ひ國威大に振ひしも、王の死後内亂起りて長政害に遭ひ、隨て彼我兩國の通商絶えたりき。清の聖祖の初年希臘人コンスタンチン暹羅に來り國王の信任を得て軍國の大權を握り、力を基督教の傳播に用ゐ、國王に說きて佛蘭西王の保護を請はしめ佛兵を國に入れしに、國人基督教を惡み佛兵を疑ひて反し、國内亂れたるに乘じ緬甸人來り攻めて國都猶地亞を

陷れしが、時に暹羅に來住せる漢人鄭昭（ファヤタークシン）なる者同志を糾合して緬甸人を驅逐し、暹羅王國を復興して都を盤谷（バンコク）に定む、時に西紀千七百六十七年なり。既にして鄭昭、内亂の爲に斃れ、西紀千七百八十二年（清高宗乾隆四十七年）ファヤ、ナアクリ（昭ノミカヒヒヤセ）王位に登り、好を清に通ぜしかば高宗之を暹羅王に封じぬ、即ち今の暹羅國王の始祖（はじめ）是なり。

安南

是より先き安南には廣南、大越の二國相對立すること百八十餘年に亙り、其間廣南は南の方、占城を破り、次で柬蒲寨（かんぼじや）を畧し、亦我邦と通商を開き國勢一時隆盛を極めしが、西紀千七百八十六年（清高宗乾隆五十一年）阮文岳なる者弟阮文惠と共に兵を擧げ、阮文岳先づ廣南を滅ぼして交趾王となり、阮文惠は大越を取りて東京王と稱せしかば、黎氏の後裔黎維那、清に奔り援を請ふ。

廣南の興亡

東京

廓爾喀部

高宗よりて兵を送りて東京を恢復せしめしも反つて阮文惠の破る所となる、然れども阮文惠は清兵の再來を恐れて降を請ひ、高宗も亦前敗に懲り其請を許して東京王に封ぜり。

時にヒマラヤ山の南麓に廓爾喀（グルカ）部あり、曩に其東隣泥波爾（ネパール）部の分裂して相攻伐せるに乘じ之を滅ぼして勢強盛に赴き、遂に西紀千七百九十一年に至り圖伯特に侵入し奪掠して還りしかば、高宗兵を遣して之を追擊せしめ、更に進んで其國都を降し奪掠品を返辨せしめて軍を還せり。

此の如く聖祖、高宗（けんそう）の二帝は、外は四方を征して版圖を擴め、内は文政を盛にして清朝の勢威前代に超えしを以て、清の極盛をいふもの今に至り尚康熙、乾隆の兩朝を並稱す。

第三章　清人の學術

明末以來學者漸く空疎なる議論を排斥して博該なる考證學を尊ぶの風を生じ、清朝に及びて此學天下を風靡し最も精覈を極む、顧炎武の如きは實に其先達なり。康熙、乾隆二帝の間清朝の極盛に達するや諸帝大に文學を奬勵し、乾隆帝の如きは親ら許多の著述を爲せり。故に學術、文藝の昌旺また此間に極點に達し、經史の研究盛にして考證の學益〻進歩し、顧炎武を始として黄宗羲、阮元、閻若璩、毛奇齡、惠棟、戴震の徒皆經學を以て家を成せり。美文學に至りては文章に魏禧（叔子）、朱彝尊（竹垞）、侯方域（朝宗）、方苞（望溪）等あり、詩賦に錢謙益、吳偉業（梅村）、王士慎（漁洋）、蔣士詮（藏園）の徒あり。戲曲小說の類には、金聖嘆、李漁（笠翁）、孔東塘の如き大家あり。史學には王鳴盛、趙翼等の泰斗ありて其名一世に高し。此の如く學術の盛なるこ共に書籍の著述刊行また盛にして、就中浩瀚なる編纂物には佩文韻府、淵鑑類函、皇清經解、康熙字典、大清會典、大清一統志、續文獻通考、四庫全書總目（提要）の如き、何れも渉獵の宏博なる古來未だあらざる所なり。後歐洲人の交通盛なるに及びては同文館を起して盛に西洋の智識を輸入せり。

考證學

詩賦文章

編纂事業

第四章　東洋に於ける蘭英諸國の競爭

西洋人の遠く東洋に來航して彼此貿易の先鞭を着けし、は葡萄牙、西班牙の兩國なりしも、其後和蘭、英吉利、佛蘭西の

和蘭人の東洋貿易

諸國も亦之に倣へり。和蘭はもと西班牙に隸屬せしも宗教上の爭より遂に其羈絆を脱し、其國人コルネリウス、ホウトマン西紀千五百九十六年（明神宗萬曆二十四年後陽成天皇慶長元年）始めて印度に入り、次でバンタムを占領せしより和蘭人奮て東洋貿易に從事し、後數年を出でずして和蘭東印度商會を設立し其勢力年と共に强大を來し、漸次葡萄牙、西班牙の商民を驅逐して遂に錫嵜、滿剌加、蘇門答剌等を奪ひ、バタヴィアを建て爪哇を根據地となし、臺灣を占領して盛に日本支那と貿易を營めり。方に是西紀十七世紀の初期にして支那は明末滿州の入寇に苦めるの時なり。

是より先き西紀千五百七十九年（明神宗萬曆七年、正親町天皇天正七年）英吉利人は始めて印度に航し、商館を印度、暹羅、爪哇に開きしも、

英國の東洋貿易

當時東洋貿易は西班牙王統治の下なる葡、西兩國の壟斷する所なりしかば、英國の貿易は尚微々として振はざりしが西紀千五百八十八年英國大に西班牙の艦隊を破りて海上の權力を掌握し、女王エリザベス遂に東印度商會を興して貿易の特權を與へしより、東洋に於ける英國の勢力は頓に膨大し、葡人と戰ひ之に克ちて孟買（ボンベイ）を得、更に東進して我平戸に來りて貿易を開き、次で支那の廣東、厦門に赴きて通商を試みしも、支那にては葡萄牙人に妨げられ日本にては和蘭人に遮られき。然も印度に於ける英國の勢力は年と共に增進せしかば、西紀十七世紀の初期より東洋貿易の實權は葡萄牙人の手を去りて和蘭人との競爭となり、殊に我日本の貿易は德川氏の基督教を嚴禁せしより和蘭人の獨占

事業となりたり。

蘭馬東洋貿易の失敗

和蘭、英吉利の諸國が東洋貿易を盛にして富を致すや、蘭馬も之に倣ひて東印度商會を起し、商船を東方に派遣したりしも和蘭人の爲に妨遮せられて志を達せず、たゞ印度南部の諸地方に基督教を傳播し得たるのみ。佛蘭西も亦之と前後して東印度商會を創めしも其效なくして解散せし

東洋に於ける佛蘭西人

が、西紀千六百七十四年に至り再び之を設置してポンヂシェリを根據地となしたり。然るに此時英人は和蘭商民の爲に印度群島より逐はれしかば、專ら力を印度貿易に集中せし

英人の印度侵蝕の始

も葡萄牙人の覆轍に鑑みて土地の侵略を後にせしに、當時莫臥兒朝衰微してヒンドヤ山南にはマーラータ同盟起りて騷擾相踵ぎ、商業上に大損害を蒙りしを以て英國東印度商會は貿易の安全を圖る爲に土地の占有を始めたり。時に英人の根據地たるマドラスは佛人の根據地ポンヂシェリと相接せるを以て勢競爭を免れざりしに、恰も此際歐洲には澳太利王位相續の亂起り英佛二國の和好破れしかば、印度に於ける此兩國殖民は互に相反目して、莫臥兒帝國の分崩と共に英佛人の攻爭となり、遂に英領印度の基を開くに至りき。

莫臥兒朝の末路

第五章　英領印度

英領印度

西紀十八世紀の中葉印度は北は益、波斯に侵蝕せられ、南はマーラータ同盟に擾され、莫臥兒朝の勢威いたく衰へたるに乘じ、歐洲人の來りて貿易に從ふ者漸次勢力を養うて

印度に於ける英佛二國の衝突

其地を占領するに至り、就中英國商民は勢を得て和蘭東印度商會を仆し遂に佛蘭西人と爭端を啓けり。蓋し印度に於ける佛蘭西總督ヂュプレイは侵略蠶食の雄圖を懷き、副王の攻伐に乘じ一を援け他を伐ちてポンヂシェリ附近の地を兼併し威名日に振ひしも、本國政府の方針一定せざりしかば其策遂に成らず。時に英國東印度商會の一書記クライヴ身を挺して起ち、佛人に通ぜるカルナヂック侯を討ちてアルコット侯を救ひ、佛の根據地ポンヂシェリを陷れしかば佛國政府は遂にヂュプレイを召還するに至り、佛國東印度商會の占領地は殆ど英人の有となれり。

クライヴ

西紀千七百五十六年シャンダナガルの佛人は孟加拉の副王と連合して英人に反抗せしも、クライヴ又之を擊破して副王の廢立を行ひ、カルカッタ附近の地は遂に英人の手に落ちしが、既にして新副王は英人の專權を厭ひ莫臥兒帝及オウドの副王と同盟して、英の堡壘を陷れ英人を攘はんとして再びクライヴの爲にプラッシーに破らる、時に西紀千七百五十七年なり。英人此捷によりて孟加拉の財政及民政を奪ひ、爾後毎に印度の内亂に干渉して漸次各地方の收稅權を納めしかば、幾ならずしてガンジス河流域の實權は英國東印度商會の手に歸せり。ヘスチングスのクライヴに代り、次で印度の民政、兵權を總督するに及び、オウドを屈して保護國となし、年金を與へて莫臥兒帝を懷け、漸次諸侯王の權威を減殺して領土を削除しぬ。是より先き波斯王ナヂル沒して國内騷擾せるに乘じ、アーマドなる者阿富汗斯坦

ヘスチングス

より起りて北印度を略し、莫臥兒帝を挾みて南の方マーラータ同盟を擊破したりしも、其死後繼承の亂起りて阿富汗王復印度を顧る能はず、マーラータ同盟も亦南北に分裂して相攻爭せり。其後佛帝ナポレオン一世の歐洲に崛起するや、マーラータ同盟を助けて印度に於ける佛人の勢力を挽回せんと圖りしも果さゞりき。是に於て英人遂に莫臥兒帝を擁してヒンドヤ山北を席捲し、南北マーラータを平定し、次で西北印度に割據せる回教徒、シック教徒を降して殆ど印度全國を征服しぬ、時に西紀千八百四十九年（清宣宗道光二十九年、孝明天皇嘉永二年）なり。

英國東印度商會全印度を征服す

英國緬甸を取る

是より先き緬甸王ボドアープラーは阿羅漢を伐て之を降し、更に暹羅を侵し反つて大敗せしかば、阿羅漢の人民此

機に乘じ獨立を謀りしも成らずして多く孟加拉に遁れ、緬甸兵之を追うて孟加拉に侵入し遂に英國と葛藤を生じぬ。會、緬甸王阿撒母の內亂に乘じて之を占領せしかば阿撒母王援を英國に請ふ。英國よりて之を援け、西紀千八百二十四年緬甸を破りて阿撒母、阿羅漢等の地を奪ひ、後亦白古を畧せしかば緬甸は深く英國を怨みしが、西紀千八百八十五年に至りて兩國の好和遂に破れ、英軍緬甸を征して悉く其地を略定し遂に印度の屬州となせり。

英領印度の反亂

印度は既に英人に征服せられしも民心尙之に服せず、其專恣に憤慨して恢復を懷ふ者多く、遂に西紀千八百五十七年に至り土兵先づ叛旗を飜してガンジス河流域一帶の地之に響應し、所在英人を虐殺して莫臥兒朝の再興を圖りし

英領印度

が英人悉く之を鎮定し、翌年遂に莫臥兒帝を廢して緬甸に幽せり、莫臥兒帝國はアクバルより此に至り三百二年を經て亡ぶ。次で東印度商會の政權を英國政府の手に移し、英國女皇は印度女皇の號を襲ひ、カルカッタ總督は英國の印度大臣の下に全印度の政務を執行するに至れり、時に西紀千八百七十六年明治九年なり。西紀千八百九十五年明治二十八年馬來半島の諸邦も聯合して英吉利の保護國となりしかば、南方亞細亞は殆ど英國女皇の威權の下に屈從し去れりと謂つ可し。

莫臥兒帝國の滅亡

第六章　清英の交渉

清、英の貿易は初、葡萄牙人の妨ぐる所となりて振はざりしが、英國東印度商會の志を印度に得てより頻に其擴張を圖り、殊に盛に印度より鴉片を輸入して二十年間に其額十倍に達し、民命を損し財帑を耗して流弊年と共に甚しきも清廷之を杜絶することを能はざりき。高宗の孫宣宗道光帝の時に及び湖廣の總督林則徐上書して其弊害を痛論せしかば、宣宗乃ち林則徐を擧げて兩廣廣東廣西の總督となし鴉片を嚴禁せしむ。林則徐よりて廣東の外商に逼り所藏の鴉片を公收し數千函を得て悉く燒棄し、禁を犯して賣買する者あらば死に處せんことを嚴令せしも、英人はもと阿片を以て重要なる貿易品とせるが故に、尚密賣を爲して已まざりしかば林則徐遂に其通商を禁ぜり。是に於て英國互市の復舊を逼りしも林則徐斷然之を拒みしかば、英將ブレメル軍

林則徐鴉片を禁ず

鴉片戰爭

清英の交渉

南京條約

艦十五艘を率ゐて舟山島を占領し、廣東、厦門等の諸港を封鎖し寧波を圍み、英の別將エリオットは渤海に入り書を贈りて和を議し傍ら形勢を偵察す。宣宗、直隷總督琦善、兩江總督伊里布を廣東に遣はし、各地の兵備を撤し林則徐の職を罷めて和を媾ぜしめしも、議調はずして英艦復浙江を侵せしかば、宣宗怒り二人の職を褫ひて再び林則徐を擧げ皇弟綿瑄親王を將として廣東に遣はす。適英將ゴーフ後援の軍を率ゐて至り、英兵の勢大に振ひ進みて廣東を取り定海、鎭海、寧波、乍浦を陷れ、英艦楊子江に入りて吳淞を下し、更に江を泝りて鎭江を畧し、清の驍將陳化成、難に死し南京爲に震駭す。宣宗初め戰を主張せしも清軍屢利を失ふを見て遂に和を成さんと欲し、伊里布を起し耆英と共に南京に赴き英國全權公使ポッティンジャーと會し、二千六百萬兩の償金を支出し且香港を英國に讓與し、更に上海、寧波、福州、厦門、廣東の五港を開放して互市場と定め和を成せり、之を清英鴉片戰爭といふ、實に西紀千八百四十二年（清宣宗道光二十二年　仁孝天皇天保十三年）なり。此戰爭によりて清國は始めて外人の侮り難きを知り、虛傲、尊大の氣稍挫けて西洋文明の利器を採用し、砲臺を設け軍艦を造るに至れり。

乾隆嘉慶年間の匪徒

第七章　長髮賊の亂　英佛の北清侵伐

清國は聖祖、高宗二帝の問盛に外征の師を出して四方を經略せしより、府庫匱乏して賦斂漸く重かりしかば、乾隆の末年より嘉慶年間に及び敎匪暴民漸く起りて亂をなせり。

長髮賊の蜂起

即乾隆の末年には白蓮教匪は明裔と稱して起り、乾州の苗魁は、吳三桂の後と號して反し、仁宗の世には南山の亂、鎭海王の盜、天里教匪の騷擾等あり」しも何れも未だ大患をなすに至らずして鎭定に歸せり。然るに鴉片戰爭起りて清廷外國に屈辱せられしより朝威漸く輕く、次で兩廣饑饉ありて盜賊蜂起せるに乘じ、廣西桂平の人洪秀全、基督教を假りて徒弟を誘ひ、西紀千八百四十九年（清宣宗道光二十九年）遂に兵を金田に起し、天父を耶和華と稱し耶蘇を長子となし自ら其次子と號し、眞言寶誥を作り四方に頒ちて不逞の徒を誘ひ國號を立てゝ太平天國といふ。時に宣宗沒して文宗（咸豐帝）立ち林則徐を遣りて之を伐たしめしに病で途に沒せしかば、文宗乃李星沅、賽尙阿等を遣る。賊は帝室繼承の機に乘じ湖南に出て長沙を攻め、更に轉じて洞庭に出て岳州を取り、進んで漢陽、武昌を下し、清廷は徐廣縉、琦善、向榮等に命じて之を防がしめしも皆功なく、賊の舟師、長江に浮び東下して九江、安慶、蕪湖を陷れ、南京を取りて之に據り直に北京を衝かんとせしかば、江北震駭し清室爲に動搖す。是に於て文宗天下に詔して勤王の兵を募りしに、湖南の曾國藩之に應じ湘勇を發して土匪を誅し、先づ湖南を復し水陸勤王の師を會して武昌を取りしも、賊將楊秀清亦武昌を奪ひ、次で賊將石達開、大軍を率ゐて南京より武昌に

曾國藩

アロー號事件

向ひしに、湖北の胡林翼拒き戰ひて大に石達開を破り、遂に大擧して再び武昌を復せり。時に曾國筌、左宗棠、李鴻章等も亦所在兵を起して征討に從事せるも、賊勢猖獗にして衰へず至る所掠略を擅にす。

曩に鴉片戰爭おりて五港を開放してより外國との交通頻繁なるに從ひ、有罪の徒の外船に投じて追捕を逃るゝ者多かりしが、西紀千八百五十六年廣州の清國官吏照會を經ずして擅に英國の商船アロー號を搜索し、清人十二名を捕へ英國と葛藤を生ぜしに、偶、廣西の清民佛國の宣教師を殺せしかば、英佛二國共に軍を合せて廣東を陷れ更に北上して直に天津に逼る。時に長髮賊の亂起りて清廷は外を顧る能はざりしかば、西紀千八百五十八年天津に假條約を結

英佛連合軍北京を陷る

北京條約

びて二國の兵を去らしめんとせしに、翌年英佛の使臣批準交換の爲に北京に向ふの途上太沽に至りて清兵の砲擊を蒙りしかば、二國直に兵を連ねて太沽を下し天津を陷れ、更に進んで北京を陷れ火を夏台、圓明園に放つ。文宗難を熱河（ヂェホル）（直隸省承德府）に避け、皇弟恭親王を遣りて和を求め、北京駐在の露國公使も亦其間に立ちて調停を試み、遂に清國は英國に千二百萬兩佛國に六百萬兩の償金を拂ひ、南京條約の五港の外更に牛莊、登州、潮州、臺灣、瓊州、九江、漢口等を開放し、英、佛兩國より公使、領事を派し、基督教公布の自由を與ふるを約して和議を結べり、之を西紀千八百六十年（清文宗咸豐十年）の北京條約となす。

此間長髮賊は尙浙江、江蘇、江西の大部に蟠居して勢猖獗

外人官軍を援く

なりしが、西紀千八百六十一年文宗沒して穆宗同治帝立つや、米人ワルド華爾特等を招聘し支那人及外國人を以て洋鎗隊を組織し、清軍を助けて賊を伐たしめ連りに克ちて常勝軍の名を得たり。後ワルド死してバチャン白齊文代りしも幾ならずして賊に降り、英人ゴルドン戈登代りて剿討に從事し屢奇功を奏せり。次で賊中内訌を生じ驍將石達開等多く官軍の獲る所となりて勢頓に衰ふるに乘じ、曾國藩諸道の官軍を合せ大擧して南京を圍みしかば、賊魁洪秀全勢窮まり自毒を仰ぎて死し餘黨遂に平らぐ、時に西紀千八百六十四年清穆宗同治三年にして、亂起りてより此に至りて十六年、賊の侵掠を蒙るもの十六省の多きに及べり

恰克圖通商條約

第八章　露人の東略　清露の關係

英露の衝突

露西亞の東方侵畧は尼布楚條約によりて一頓挫をなせしが、後清の世宗の世に及び外蒙古、天山北路平らぎて西伯利亞との交通頻繁となりしかば、露國は屢使を清國に遣して通商條約を規定せんことを求め、遂に西紀千七百二十八年清世宗雍正六年に至り恰克圖條約を結び、恰克圖を以て兩國の互市場となし、北京に至りて通商し又公使館、敎會堂を建設するを許されたり。かくて清國が前約を賴みて北方の警備を怠れるに乘じ、露國の東部西伯利亞總督ムラヴヨフは連りに侵略を企て、黑龍江口の民を移してニコライスクを建て

愛琿條約

新に境界を定めんことを清廷に迫りしも、時に清國は内に長髪賊の亂あり外に英、佛との葛藤ありて北顧の遑なかりしかば、西紀千八百五十八年（清文宗咸豐八年）文宗遂に黑龍江北の地を割き、松花江、烏蘇里江の通航權を與へて愛琿條約を結べり。次で露國は清廷と英、佛二國との間に調停の勞を執りし報酬として、清國に烏蘇里江東の地を割かしめ浦鹽斯德を建設す、實に西紀千八百六十年なり。是より先き露國は西紀千七百九十年前後より我北門を侵せしが、遂に西紀千八百七十五年（明治八年）に至り千島との交換を名として薩哈連（樺太）全島を占領せしかば、東西伯利亞、黑龍江地方の三大部を併せて北方亞細亞の地は悉く露國の有に歸したり。

初め準噶爾部の隆盛に赴くや當時伊犂の西北、ジール河の東北一帶の地を占領せる大中小三部の吉利吉思族は其逐ふ所となりて、ジール河の下流とウラル河との間に移りしが、小吉利吉思部先づ露國に降り、次で中吉利吉思部も亦降りて其保護を仰ぎしかば、露國は是等邊民の統御を名として漸次にオムスク、ウラルスク、オレンブルグ、アラルスク等の新城堡を建設し、更にシール河に沿うて侵略の歩を進め遂に浩罕（コーカンド）國を蠶食せり。

吉利吉思部

浩罕布哈拉撒馬爾罕三汗國の攻爭

浩罕國はもと布哈拉汗に屬せしが、西紀千七百年の頃察合臺の遠孫シャー、ルクーなる者布哈拉汗の衰微せるに乘じ、此に據り獨立して浩罕汗と稱せしより布哈拉汗との攻爭常に絶えず、西紀千八百二十七年ナスルラの布哈拉汗となるに及で浩罕に侵入し一時其地を占領せり。是より先き

基華汗國も亦もと布哈拉汗に屬し、後獨立して互に相攻爭せしが、今や布哈拉汗の浩罕に侵入せるを窺ひ其虛に乘じて布哈拉を襲ひしかば、浩罕は僅に其獨立を恢復するを得たり。

露國三汗國を侵略す

かく三汗國の攻爭せる間に露國は著々侵略の歩を進めて土耳其斯坦を奪ひ、西紀千八百六十五年更に塔什干を略せしかば、浩罕遂に援を布哈拉に求め與に協力して露軍を擊ちしが反つて大敗し、露將カウフマンは兵を進めて霍闐を取り撒馬兒罕を陷れ遂に布哈拉を圍みしかば、布哈拉汗は援を亞富汗に請ひ亦英國の同盟を求めしも成らず、已むを得ず西紀千六百六十八年露國に五十萬留五十五萬圓餘の償金と撒馬兒罕以北の土地とを與へ、且其保護國たるべきを約して和を媾ぜり。次で露國は基華汗國が西紀千八百五十五年波斯と戰て敗れ、且王位繼承の爭起りて國勢振はざるに乘じ、西紀千八百七十三年遂に之を擊破して二百二十萬留二百四十二萬圓餘の償金とアム河以北の土地とを奪ひ、且其保護國たるべきを盟はしめたり。是より先き浩罕國も亦露國の保護國となりしが、國人之を悅ばずして屢露人を殺せしかば、西紀千八百七十六年に至り露將スコベレフ遂に之を討滅して露國の版圖となせり。

清と天山南路

曩に清の高宗の天山南路を平定するや和卓の浩罕に逃れたる者多く、就中布羅尼持の子孫等浩罕の兵を借りて屢天山南路に侵入せしかば、宣宗の世年金を浩罕に與へて和卓の一族を其國內に禁錮せしめしより天山南路稍平穩な

るを得たりしが、穆宗の世清廷が内憂外患に苦めるを機とし、西紀千八百六十二年河西の回教徒東干族先づ反し、天山南路の回教徒並び起りて之に應ずるに及び、布羅尼特の曾孫ブツルク兵を起して喀什噶爾に侵入せしも、部將阿古柏之を廢し代りて其衆を率ゐ天山南路及河西の回教徒を降して都を阿克蘇に定め、好を英露及土耳古に通じて清に抗せしが、阿古柏の沒後内亂起れるに乘じ、清の陝甘總督左宗棠之を鎮定して天山南路を復しぬ、時に西紀千八百七十八年清の光緒四年なり。

露國伊犂を蠶食す

是より先き露國は西紀千八百四十年の頃大吉利吉思部を服し其疆域直に清と相接するに至りしが、今や天山南路に回教徒の反亂ありて伊犂の回教徒も亦之に應じて紛擾せるに乘じ、露國は其邊陲を靖んずるを名として西紀千八百七十一年伊犂の回教徒を伐ち其地を占領せり。清軍已に回教徒を平定するに及んで其返還を請求せしも應ぜざりしかば、清廷は崇厚を露國に遣りてリワヂア條約を締結せしめしに、讓歩度を過ぎしを以て群議紛出して之を廢棄し爲めに露清の開戰を見んとせしが、清廷更に曾國藩の子曾紀澤を露國に遣りて再び談判を開き、兩國互に讓歩して霍爾果斯河伊犂河の上流を以て露清の境界となし、清國より九百萬留一千萬圓弱の償金を露國に支辨するを約し事遂に結了せり、之を伊犂條約といふ實に西紀千八百八十年清の光緒六年明治十三年なり。

伊犂條約

露國の南侵

今や露國は清國と境界の紛爭を解きたるを以て、更に中央亞細亞より印度に南下せんとして英國と衝突を惹き起し

波斯と露國

ぬ。初め波斯はナヂルの沒後國内久しく騷擾し、遂に西紀千七百九十四年に至り今のカシアル朝の始祖アガ、ムハメッドの一統する所となりしが、恰も此時露國が高加索地方を侵畧せるより遂に露國と葛藤を生じ、波斯は英國の後援を得て露軍を排擊せしも、後英國の露國を憚り後援を辭するに及んで連りに破れ、西紀千八百二十八年裏海の西岸アラクセス河北の地と償金とを露國に與へて和を請へり。次で波斯は露國と結び亞富汗斯坦に侵入して哈烈を抄掠せしかば、印度總督オークランドは亞富汗王ドストムハメッドに說き同盟して之に當らんとし、ドストムハメッドの之を肯ぜざるや、西紀千八百三十九年直に軍を進めて可不里を陷れシャー、スーヂャを擁立しぬ。然るに亞富汗人新王に服せずドスト、

英國と亞富汗斯坦

露國と亞富汗斯坦

ムハメッドの子アクバールを奉じて亂を作し駐在英軍を虐殺せしかば、印度總督エレンボローは再び河富汗斯坦を征し、ドストムハメッドの王位を復し之と同盟して波斯及露國に當れり。後ドストムハメッド沒して其子シャー、アリー繼ぎ英國と同盟して露國の南侵を拒ぎしが、次で密に露國と結び西紀千八百七十八年印度總督リットンの送れる使者を拒絕せしを以て、英軍直に亞富汗斯坦を侵しアリーを逐うて其子ヤクブを立てしに、後幾ならずヤクブは英人を虐殺せしかば、英軍進んで可不里を占領し、ヤクブを廢して其從兄アブヅル、ラーマンを立てぬ。時に露國は既に基華を降しメルヴを取り更に進んで哈烈に逼りしかば、英國は亞富汗王を助けて將に露國と戰はんとせしが、西紀千八百八十七年

バミール問題

に至り英國一歩を譲り境界を確定して平和の局を結べり。但し其東北バミールの境界は露英清三國に關聯して紛爭絶えざりしが、僅に千八百九十五年に至りて其局を結びぬ。

第九章　安南遅羅　清佛の交渉

越南

初め阮文岳の廣南を亡ぼして交趾王と稱するや、阮潢の裔孫阮福映なる者遁れて遅羅に奔り、援を其王ファヤ、チアクリに求め還りて柴棍に據り、次で佛國宣教師の言を聽き事成らば化南島を割き且ツ通商の自由を許すの約を以て、兵を佛國に借り阮文惠に抗せしが、後幾ならず、阮文惠歿して國内亂れたるに乘じ、阮福映先づ上中交趾を徇へ順化（フエ）の故都を復し、東京を陷れて安南を一統し國號を立て越南といふ、

遅羅眞臘を征服す

越南と佛國との交渉

時に西紀千八百三年（清世宗嘉慶八年）なり。

時に遅羅王ファヤ、チアクリ大志あり、安南の紛擾に乘じて眞臘を併呑せんと圖りしが、會眞臘王の其弟と爭へるを機とし、ファヤ、チアクリは眞臘王の弟を助けて其北邊を畧せしに眞臘王援を越南に求めしかば、越南王直に之を諾し兵を出して頻に遅羅と爭ひしも、戰利あらずして西紀千八百四十一年に至り眞臘遂に遅羅の朝貢國となれり。

曩に越南王の安南を統一するや、佛國に對して化南島割讓の約を果さず、反つて屢佛國の宣教師を虐待せしかば佛國は遂に東方侵略の意を決し、西紀千八百五十八年東京地方に反亂あるに乘じ越南を破り柴棍を下しぬ。時に越南には阮福映の孫阮弘智位に在りしが、償金二千万法（フラン）八百萬圓弱

越南佛國と開戰す

を支出し交趾支那三州の地を割きて和を媾ぜり。佛國は既に柴棍を根據地となし、次で眞臘の請を納れて其保護國となし、亦越南の佛人を殺害せるを責め、其王に逼りて基督教の公布と紅河の航行權を承認せしめ、更に其商賈の保護を名として擅に河内、海防に兵を置くに至りしかば、越南王は佛人の專横を怒り長髪賊の殘將劉永福を引きて佛人を攘はしむ。是に於て佛國と越南との交戰起り、佛國の海陸軍進みて南定、河南を陷れしも劉永福の黑旗兵能く防ぎて之を復せしが、佛將クールベー兵を轉じて順化府を衝き遂に之を陷るに及んで、越南王和を請ひ東京地方を擧げて佛國に割讓し、國を以て佛國の保護國となし其承諾を得るにあらざれば他國と交通せざるを約す、時に西紀千八百八十三年（明治十六年）なり。

清佛の交渉

然るに阮氏はもと清の封册を受けて越南王たりしを以て、今や清國は佛國の越南を保護國となさんとするに異議を唱へ、李鴻章、曾紀澤をして之を詰問せしめしも佛國固く執りて聽かざりしかば、遂に越南に對する權利を放擲せり。既にして佛軍條約履行の爲に進んで諒山（紅河の上流）を占有せんとするや、清國の守兵逆擊して大に佛軍を破りしかば、佛國は償金一千二百萬法（フラング）（四百八十萬圓弱）を請求せしも清國應ぜずして兩國の和好遂に破れ、清將馮子材は黑旗兵を助けて東京を攻め、佛國の陸軍はネグリエールを將として諒山を降して鎭南關内に侵入し、クールベイは其海軍を引率して福州の沿海に戰ひ、大に勝ちて清國の福建艦隊を殲し湖澎島

を占領して臺灣の諸港を封鎖せり。會クールベイ病を獲て沒し、佛國の輿論も遠征を非とし廟議動きて內閣交迭し、諒山は馮子材の恢復する所となる。是に於て西紀千八百八十五年明治十八年兩國互に歩を讓りて和約を天津に結び、佛國は嚮に提出したる償金の要求を撤回し、清國は越南を棄て佛國の東京地方を占領するを承認せり。

東洋に於ける英佛の境界問題

暹羅は是より先きマングート王立ち、專ら開國の方針を採りて英佛諸國と通商條約を結び、其子チュラロンコルン王に至り夙に西洋の文化を移殖して內治の改良を圖り頗る令名ありしが、佛國既に東京地方を占領するに及んで又暹羅を侵畧せんと欲し、湄公河東の地が嘗て眞臘、越南の有たりしを主張し威迫して之を割かんことを求むるや、暹羅王は百方之に抗議し將に戰を開かんとせしも其敵し難きを察し、所要の土地と償金五百萬法二百萬圓弱とを與へて平和を恢復しぬ、時に西紀千八百九十三年明治二十六年なり。然るに英國は嚮に緬甸を併せて湄公河の上流を扼せしより、支那雲南との交通を專有せんと志せしが、佛國湄公河東の地を得ば其利益を侵害せらるゝを恐れて異議を唱へ、遂に湄公河の上流に五十英里の中立地を置きて事漸く決せり。

朝鮮と佛米二國との交渉

第十章　清韓の關係　明治征清の役

朝鮮は清の太宗の征する所となり、仁祖其封册を受けて以來清の外藩となりしが、歷代の國王概ね幼弱にして卽位せしかば太后屢〻政を攝し、遂に外戚專權の弊を生ぜり。西

紀十八世紀の末より基督教徒の朝鮮に布教を試むる者多く、後佛國の宣教師ラブニール來りてより西教の勢力頓に大なりしが、西紀千八百六十三年（孝明天皇文久三年）仁祖九世の孫李熙位に卽き、其實父大院君李是應國政を執るに及んで基督教を嚴禁して其徒を虐待し、佛人の迫害を蒙る者ありしかば、佛國之を清廷に問ひしに清廷關知せずといふを以て、西紀千八百六十六年軍艦七艘を派して江華島を占領せしも利なくして軍を還へしぬ。次で米國商船の大同江附近に於て佛國船と誤認せられて朝鮮人に劫略せられし者あり、米國は之を清廷に訴へしに清廷復朝鮮の事は其知る所にあらずと答へしかば、西紀千八百七十年軍艦五艘を派して江華島の砲臺を破りしも成功なくして退けり。

大院君

我國朝鮮の獨立を認む

琉球

是より先き我邦は德川氏世、朝鮮と好を通ぜしが、王政復古するに及んで亦屢、隣交を朝鮮に修めんとせしも、佛米兩國の兵を退けし大院君は頑として之に應ぜざるのみならず、其兵江華島に於て我雲揚艦を砲擊せしかば、我邦は黑田清隆、井上馨をして其罪を問はしめ、更に修交條約を結びて釜山の外元山、仁川を開放するを約し且、朝鮮の獨立國たるを認む、實に西紀千八百七十六年（明治九年）にして是より米英、獨、露、佛の諸外國皆朝鮮の獨立を承認して條約を訂せり。

「琉球は西紀千三百七十二年（明太祖洪武五年、後圓融天皇文中元年）始めて明、の封冊を受け、同時に復我邦に臣服せしが後其來貢を止めしかば、西紀千六百九年（明神宗萬曆三十七年、後陽成天皇慶長十四年）島津家久之を征して其王尙寧を降せしより、永く島津氏に隷して我屬

邦となり、次で復、清國に對して藩屬の禮を取りしが、西紀千八百七十二年明治五年我邦の其王尙泰を冊封して藩王となし、我官吏を駐在せしめて內外の政務を處置するに及んで清廷頗る之を含む。會、琉球の藩民臺灣に漂着して生蕃の爲に虐殺せられしかば、我邦之を清廷に詰りしに、生蕃は化外の民なりと公言して其責に任ぜず、我邦よりて西紀千八百七十四年明治七年西鄕從道をして生蕃を征定せしめ、しに、清廷前言を食みて異議を唱へしかば、我全權委員大久保利通、天津に至り清廷をして償金五十萬兩を納れしめ臺灣征討の兵を撤しぬ。此一擧によりて琉球の我版圖なることを確定し、後藩を廢して沖繩縣を建てしに清廷復、異議を唱へ、兩國の感情是より背馳し始めたり。

臺灣征伐

大獨立黨の軋轢

朝鮮は國王年已に長じ大院君政を返して退隱せしが、王后閔氏の族權勢を逞うするを見て平なる能はず、遂に西紀千八百八十二年明治十五年京城の鎭兵を煽動して閔族を擊ち我公使館を燒かしめ、排外鎖國の主義を復せんとせしに、清國は馬建忠、丁汝昌等を遣りて暴徒を鎭定し大院君を挾んで國に歸り、我邦は井上馨を遣はし其罪を責めて償金五十五萬圓を支出せしめ守備兵を京城に置くを約せしかば、清國も亦我に倣ひて兵を朝鮮に駐在せしめたり。是に於て朝鮮の國論二派に分れ、一は閔族を首領として專、清廷に依賴する輩よりなりて事大黨といひ、他は我國に賴りて獨立を全くせんとする朴泳孝、金玉均等の派にして獨立黨と稱す。西紀千八百八十四年明治十七年獨立黨刺客を放ちて事大

黨の當路者を襲ひ國王を擁して我公使に賴りしが、會、清兵事大黨を助けて獨立黨を討ち我公使館を燒きしかば、我公使は兵を收めて國に歸り朴泳孝、金玉均等逃れて我邦に投ず、之を甲申の亂といふ。我邦よりて井上馨を朝鮮に遣はして償金十三萬圓を支出せしめ、翌年伊藤博文を清國に遣はして李鴻章と天津に會し、朝鮮に駐在せる彼我兩國の兵を撤し、若し兵を朝鮮に出す時は互に相通告せんことを約す、所謂天津條約是なり。

天津條約

明治二十七八年征清の役

西紀千八百九十四年（明治二十七年）朝鮮に西敎を排し、東學を起さんとする一派の徒自ら東學黨と稱し亂を作すや、四方不逞の徒之に結托し賊勢頗る猖獗にして國兵之を鎭むる能はず。我邦よりて兵を出して清國と與に力を協せて朝鮮を助けんと圖りしに、清廷は我勸言を斥け天津條約を破りて擅に兵を出し、暴徒鎭壓を名とし再び朝鮮を屈して外藩の實を擧げんとせしかば、我邦遂に清廷の非を鳴らして懲膺の戰を宣するに至れり。是より先き我兵先づ牙山の清兵を擊攘し、我海軍も亦豐島沖に清艦を破りしが、彼我互に宣戰を公布するに及んで、我第一軍は直ちに海を渡りて清兵を平壤に擊破し、北ぐるを逐うて盛京省に入る。而して我海軍は清國の北洋艦隊を黃海に破り、次で第二軍は直に遼東半島に上陸す。是に於て旅順口、威海衛共に陷り、我海軍

李鴻章

馬關條約

は渤海灣を扼し、陸軍は牛莊に據りて將に北京に向て進擊せんとし、別軍は更に澎湖島を畧しぬ。清廷乃チ李鴻章を我邦に遣はし伊藤博文と馬關に會して和を請ひ、朝鮮の獨立を認め、償金貳億兩を納れ、遼東半島、臺灣、澎湖島を割き、沙市、重慶、蘇州、杭州を開放するを約せしに、露國は獨、佛二國と連合し、東洋平和の爲に我の遼東半島の領有を永久にするなからんことを勸めしかば、我邦は時宜に從て其勸告を容れ、代償金三千萬兩を受けて遼島半島を清に還附し征清の師を班へせり、實に西紀千八百九十五年にして之を明治二十七八年征清の役といふ。

第十一章　東洋に於ける英露及佛獨米

日清戰役後東亞諸國の形勢

獨逸膠州灣を永借す

世界に於ける東亞諸國の現勢

歐洲諸强國は日清戰役後清國の兵備全く缺けて能く爲すなきに乘じ各、其利益を獲得せんと力め、盛に其東洋艦隊を派遣して太平洋に遊弋せしむるを以て、爲めに東亞の地は世界に於ける政治上商業上の中心となれるが如き觀を呈するに至れり。戰後幾ならずして佛國は清國より東京境界改定の利益、東京鐵道の延長及廣東、廣西、雲南の三省に於ける鑛山採掘の特權を得たり。次で西紀千八百九十七年明治三十年獨逸の宣教師山東省に於て清人に殺害せらるゝや、獨逸は直に軍艦を膠州灣に派遣して之を占領し、清廷と

談判の結果向後九十九年を期して之を借り入れしかば、英國は清廷に逼り楊子江沿岸地方を今後何れの邦國にも貸與し若しくは割讓せざることを誓はしめき。

露國旅順港大連灣を永借す

露國は千八百九十五年カシニー條約によりて旅順港及大連灣占有の端緒を啓きしが、翌年更に其永借及滿州鐵道敷設に關する要求を提出せしかば、清廷は先づ滿州鐵道の敷設を承認し、更に西紀千八百九十八年（明治三十一年）に至り旅順港及大連灣を二十五年の期限を以て貸與するを許せり。

英國威海衛を永借す

是に於て英國は露國と均勢を保たんが爲に威海衛の永借を要求し、佛國も亦廣州灣の永借及東京鐵道の再延長を要求せしに、清廷拒むを得ず威海衛を英國に、廣州灣を佛國に各、二十五年の期限を以て貸與し、同時に佛國と東京鐵道を

佛國廣州灣を永借す

雲南に延長すること、及廣東、廣西、雲南の三省を他國に割讓せざることの條約を結びしかば、我邦も清廷に福建省を他國に割讓せざるを誓はしめしに、後伊太利も亦口實を設けて三門灣の永借を要求せしが清廷の拒絶する所となれり。

北米合衆國と比律賓

是より先き比律賓諸島は久しく西班牙の壓制に苦みしが、遂に西紀千八百九十四年に至り叛きて獨立を圖り、屢、西班牙軍を破りて將に成效せんとせしに、會、西紀千八百九十八年米國のキューバを獨立せしめんが爲め、西班牙と戰を開き其海軍を擊破して和を媾ずるや、比律賓諸島は遂に米國の版圖に歸せしかば、島民再び叛きて獨立を圖りしに米國は兵を送りて之を鎭壓せり。

義和團起る

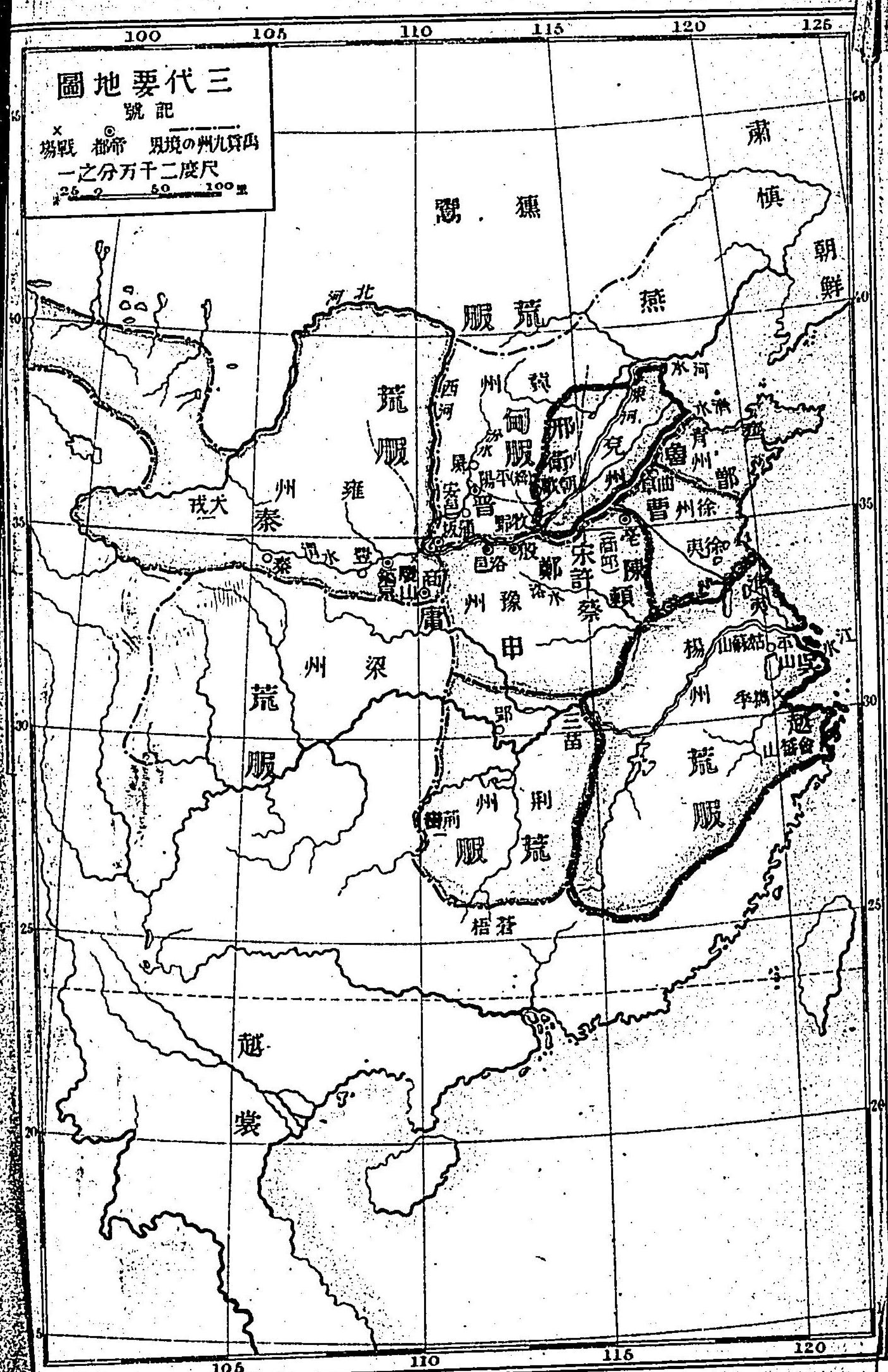
西紀千九百年（明治三十三年）清國に義和團と稱する暴徒起り、基

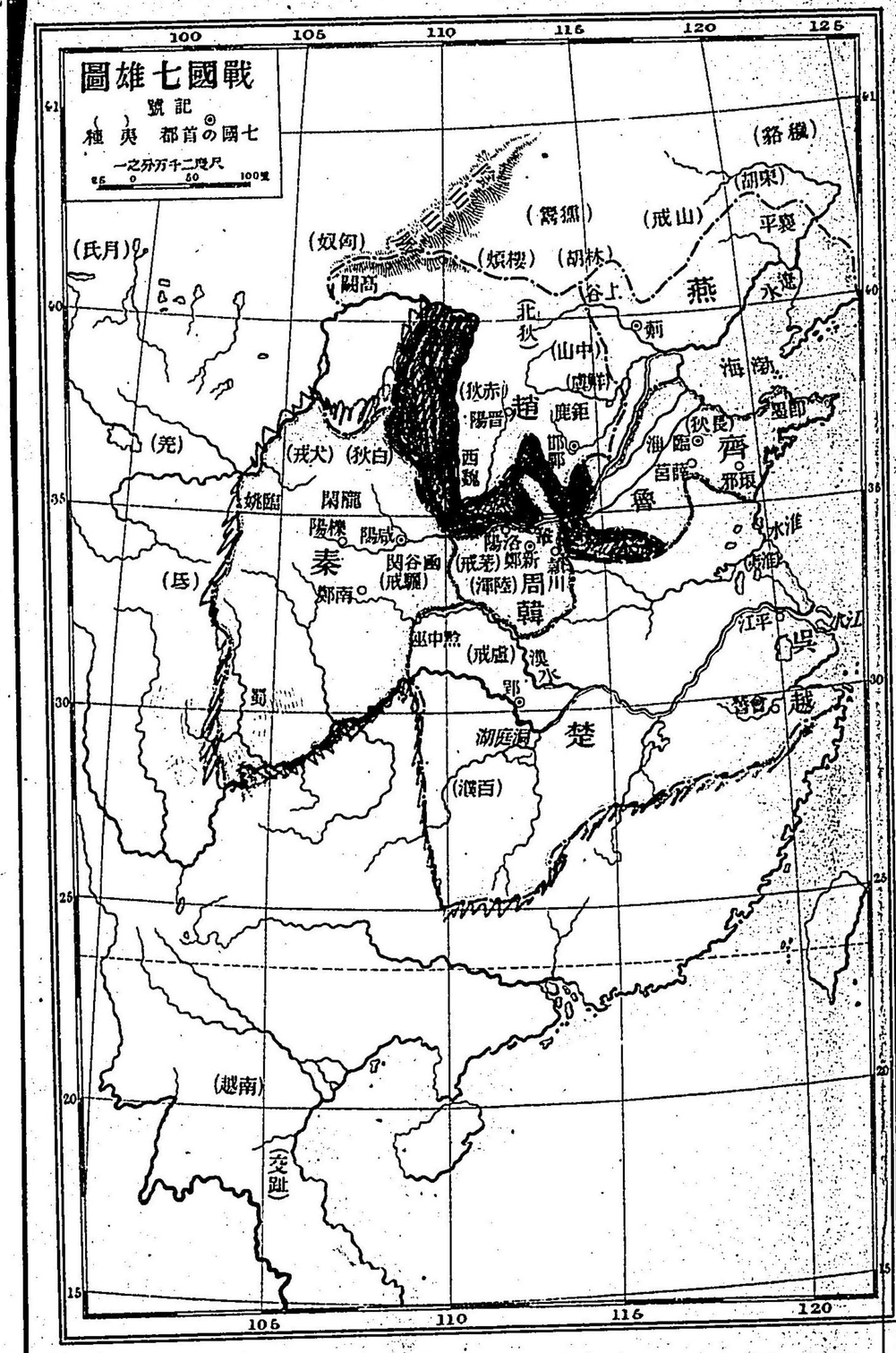
督敎を排斥して外國人を殺戮し、清兵の之に應ずる者ありて遂に北京に入り、各國公使館を包圍し在留外人の害に遭ふもの頗る多し。是に於て我邦は率先して英露佛獨米等の諸國と連合軍を組織し、太沽を畧し天津を陷れ進んで北京に入り公使等を救ふことを得たり。然るに清廷既に難を避けて西安に遷りしかば、連合軍北京を占領し更に兵を派して暴徒を鎭壓し、次で清廷をして元兇を處罰し償金を約さしめて撤兵することに決せり。

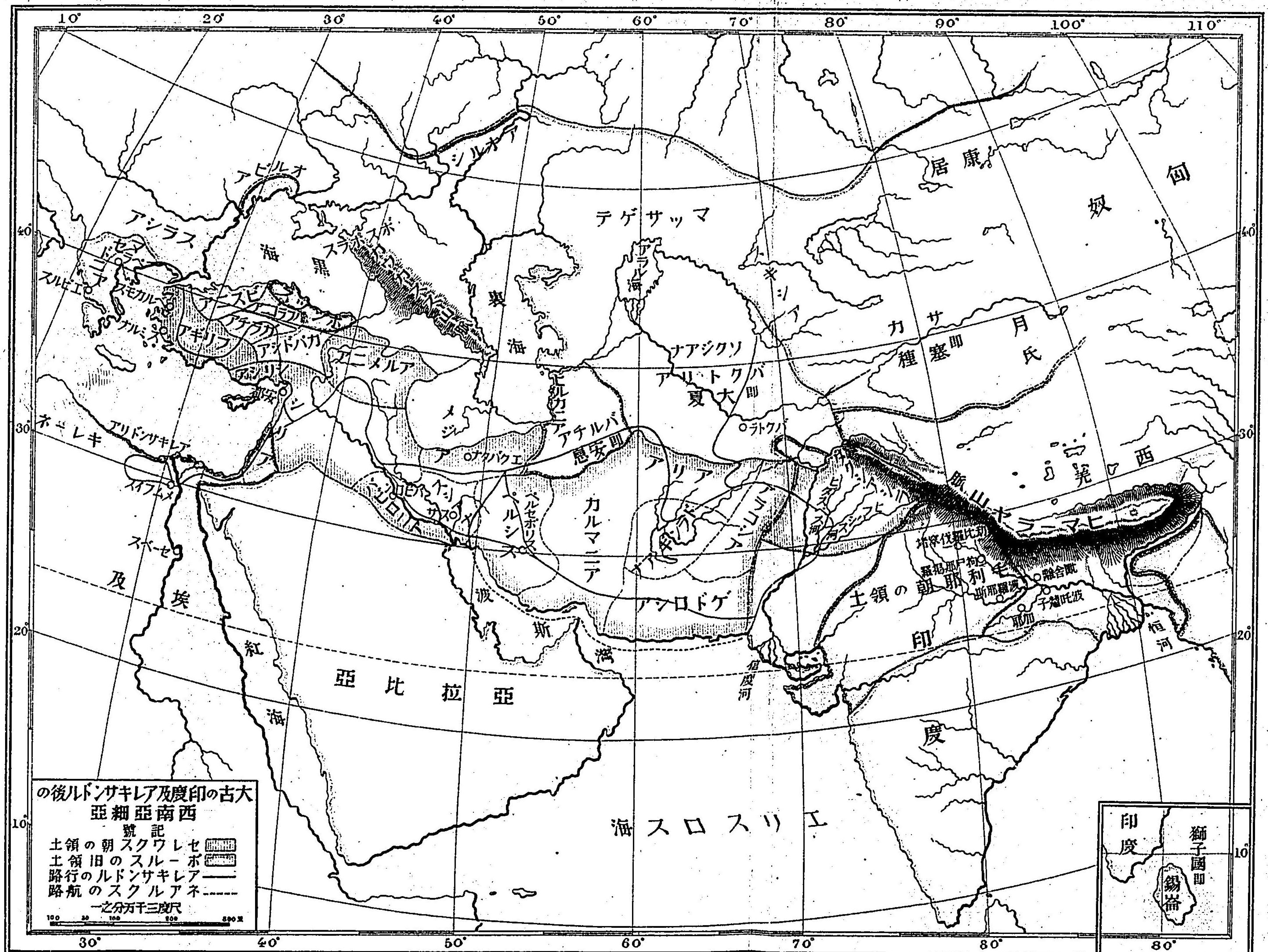
此の如く清國の近狀は動もすれば他國の干涉を惹起さんとし、我邦を除きて東亞に獨立の體面を保つ者は朝鮮、暹羅の二國あるも、朝鮮は尙ほ友邦の扶植を要し、暹羅は勢微弱にして共に他國の爲に覬覦せられつゝあり。之に反して歐洲列强の勢力は時と共に增進し來り、爲めに東洋は今後益多事ならんとす、我國民たる者深く意を我邦の位置と隣邦の形勢とに注ぎ、憤發勵精國家の爲め力を盡さゞるべけんや。

世界に於ける我邦の位置と我國民の態度

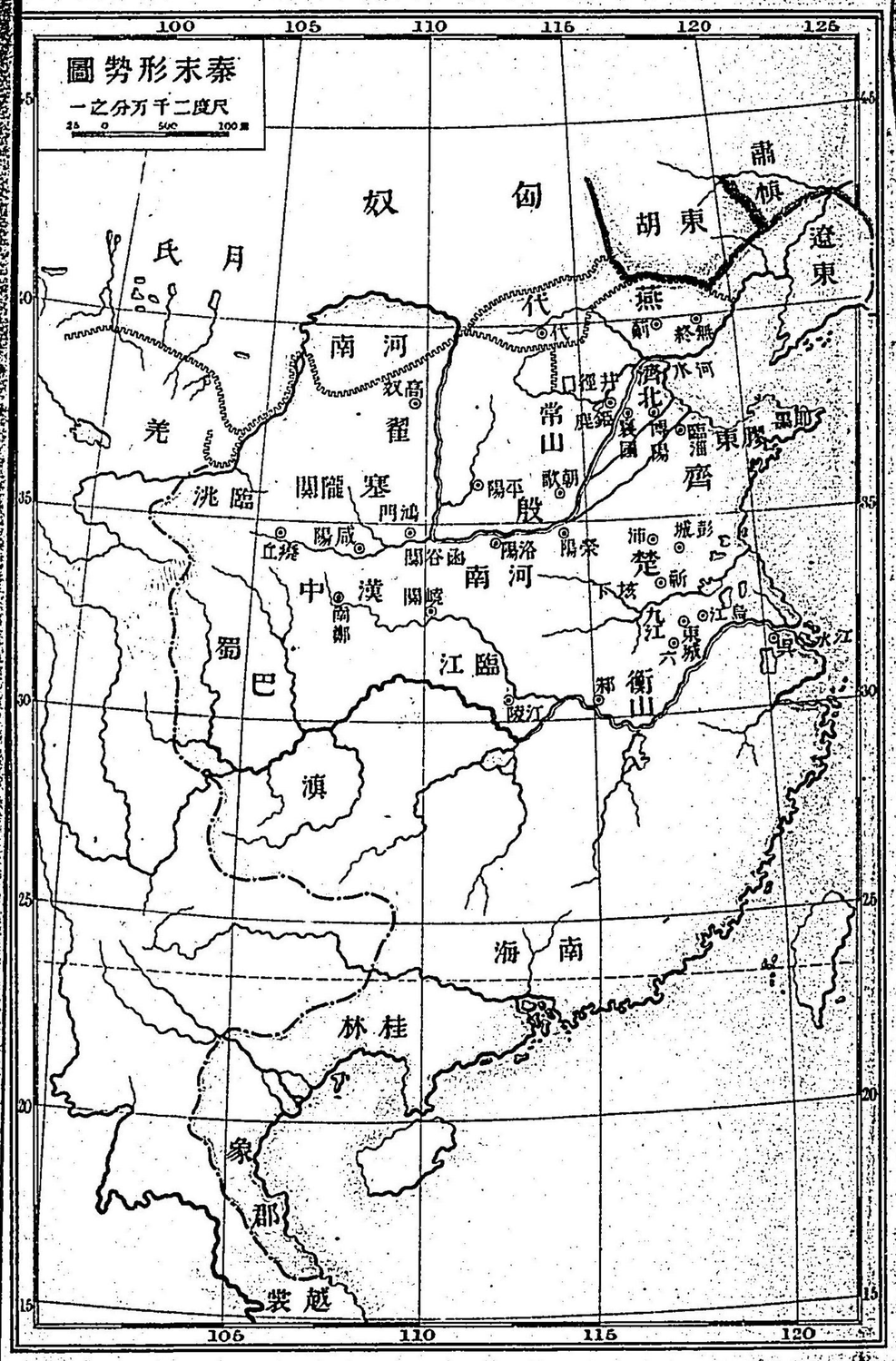
新撰東洋史終

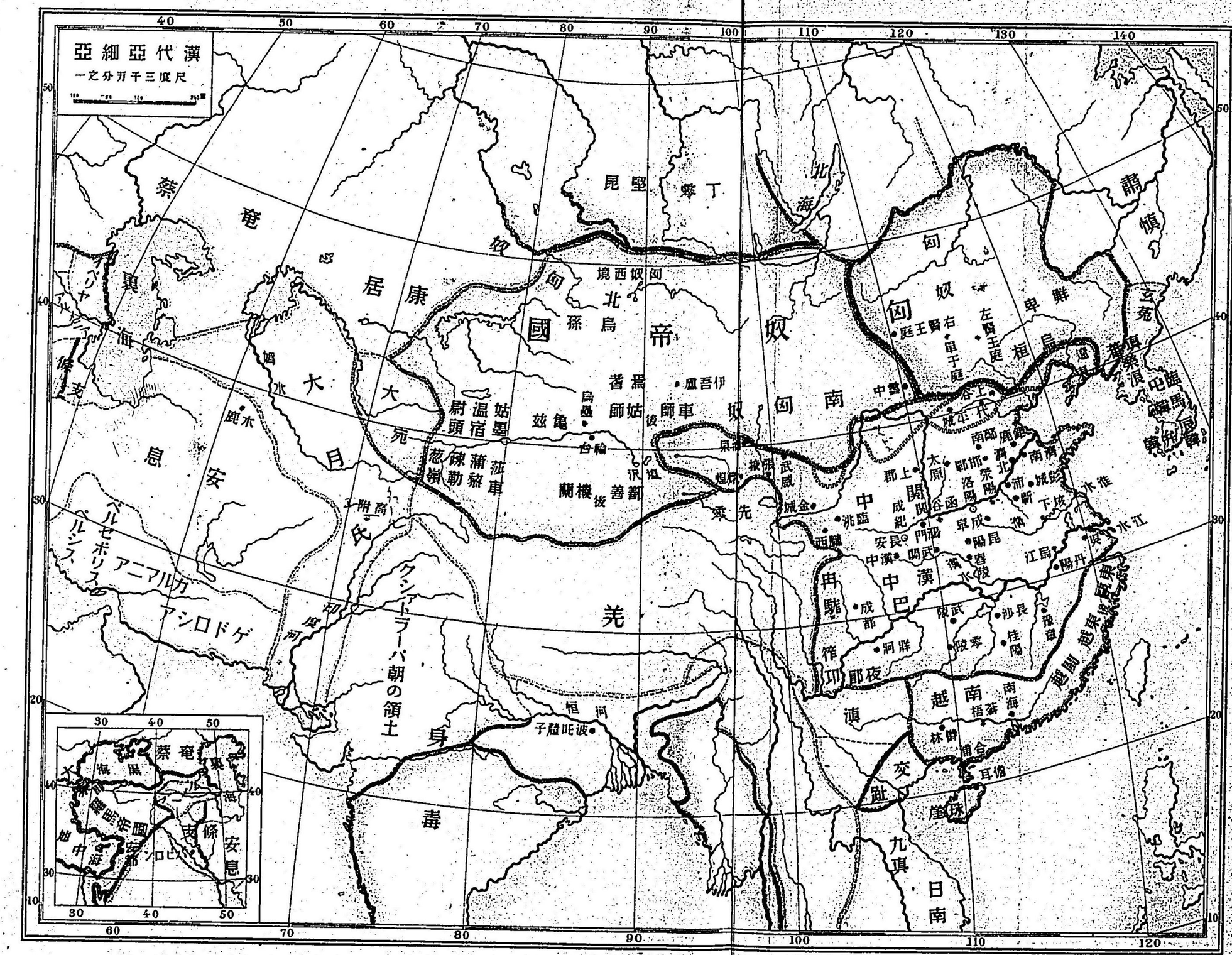

三代要地圖
記號
禹貢九州の境界
帝都
戰場
尺度二千万分之一
25 0 50 100 里
100
105
110
115
120
125
肅愼
獯鬻
朝鮮
燕
荒服
冀州
雍州
梁州
豫州
荊州
揚州
徐州
青州
兗州
犬戎
三苗
蒼梧
越裳

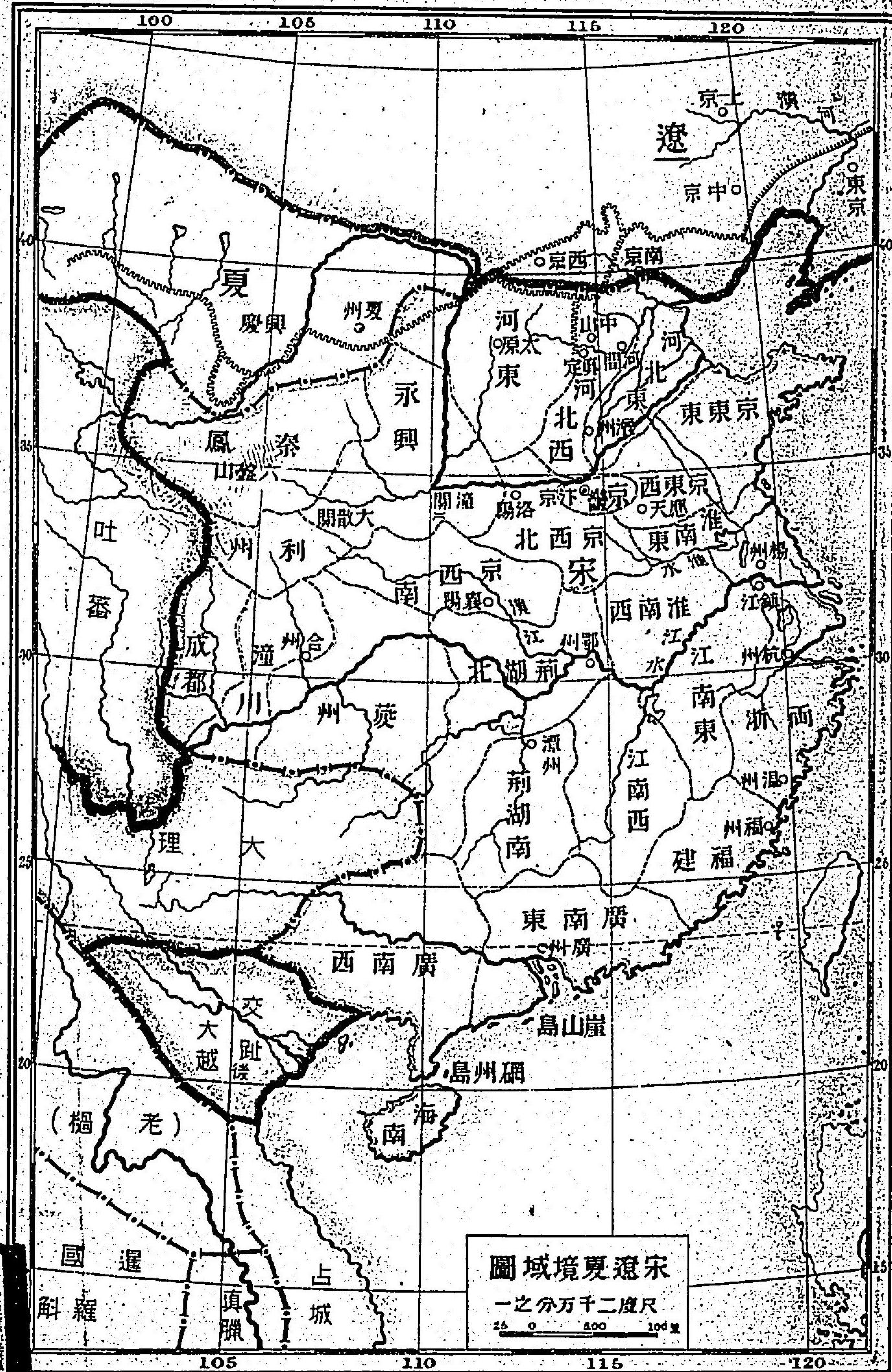

戰國七雄圖
記號
七國の首都 ◎
種族 ( )
尺度二千万分之一
(貉)
(朝鮮)
平壤
(戒山)
(駕獫)
(燕)
(氏月)
(奴何)
(烦樓)
(胡林)
谷上
燕
水道
北狄
薊
(山中)
(虞鮮)
海渤
(狄赤)
陽晉
趙
鹿鉅
邯鄲
(狄長)
即墨
(羌)
(戎犬)
(狄白)
西魏
淄臨
齊
莒
邪琅
魯
姚臨
關隴
陽樓
陽城
陽洛
雒
(戒茫)
鄭新
新川
(渾陸)
周
韓
秦
關谷函
(戒駱)
鄭南
(氐)
水淮
淮
江平
吳
江
巫中黔
(戒虛)
淇水
鄂
蜀
湖庭湖
楚
會稽
越
(濮百)
(越南)
(交趾)



大古の印度及アレキサンドル後の
西南亞細亞
記號
セレウクス朝の領土
ボールスの旧領土
アレキサンドルの行路
ネアルクスの航路
亞拉比亞
印度
紅海
埃及
エリスロス海
波斯灣
黒海
裏海
匈奴
康居
月氏
塞種
西羌
ヒマラヤ山脈
マッサゲテ
ソクジアナ
バクトリア
大夏
パルチア
安息
アリア
ゲドロシア
カルマニア
ペルシス
メヂア
アルメニア
恒河
信度河
獅子國
錫崙

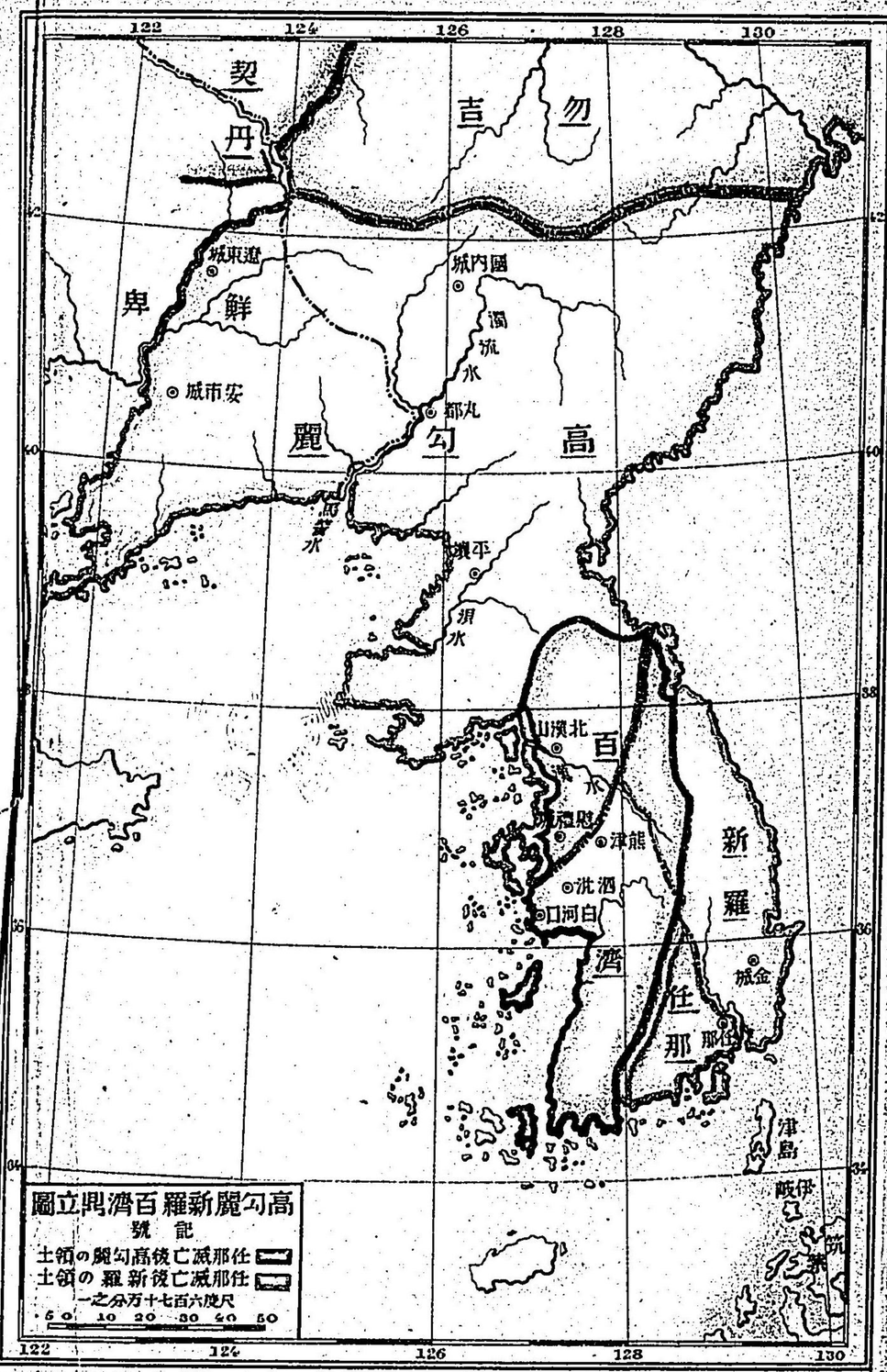

秦末形勢圖
尺度二千万分之一
匈奴
東胡
肅慎
遼東
月氏
羌
代
燕
薊
無終
河南
高奴
翟
井陘口
鹿
常山
趙
朝歌
平陽
殷
臨淄
東膠
齊
臨洮
關隴
塞
鴻門
咸陽
丘墟
函谷關
洛陽
滎陽
河南
彭城
沛
楚
新
下邳
中
漢
南鄭
蜀
巴
江臨
陵江
九江
六
東城
江陵
衡山
郢
滇
海南
林桂
象郡
裝越

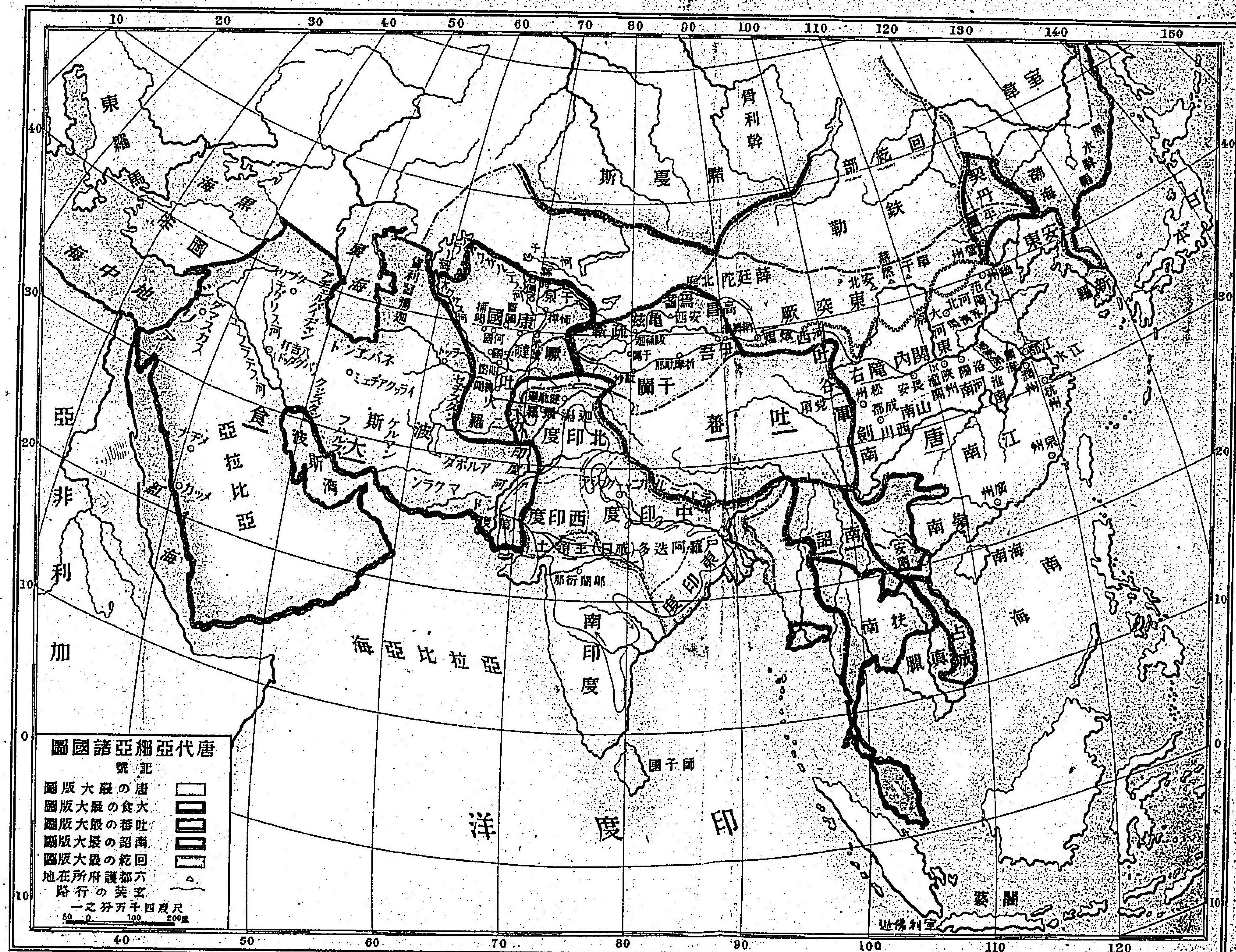

漢代亞細亞
一万分之一
尺度三千万
蔡
竜
居
康
大
月
氏
息
安
ペルセポリス
アニアルカ
アシロドゲ
クシアトラーパ朝の領土
身
毒
羌
匈奴
匈奴帝國
北海
丁零
堅昆
烏孫
烏桓
鮮卑
匈奴
南匈奴
中國
關中
巴漢
越南
南海
交趾
九真
日南
朱崖
玄菟
樂浪
遼東
遼西
上谷
代
城平
中山
太原
郡上
鄴邯
洛陽
成紀
函谷
泉成
陽昆
門武
安長
中漢
閬武
沙長
桂陽
陵武
陵零
成都
洞胖
梧蒼
林邯
浦合
耳僑
江烏
陽丹
水江
下邳
城彭
南清
南鹿
濟北
城金
武威
張掖
先零
泉清
後
車師
姑師
烏孫
烏壘
龜茲
台輪
蒲類
蒲類
蒲類
菰
車
沢鄯善
蘭樓
後
温宿
姑墨
尉頭
疏勒
葱嶺
附喬
河
恒河
子賢
波吐
婚水
水
鹿
海
黒
海
中
海
ペルシア
ソロビア
安息
東海
遼東
遼東
越南
越南
越南
越南
越南



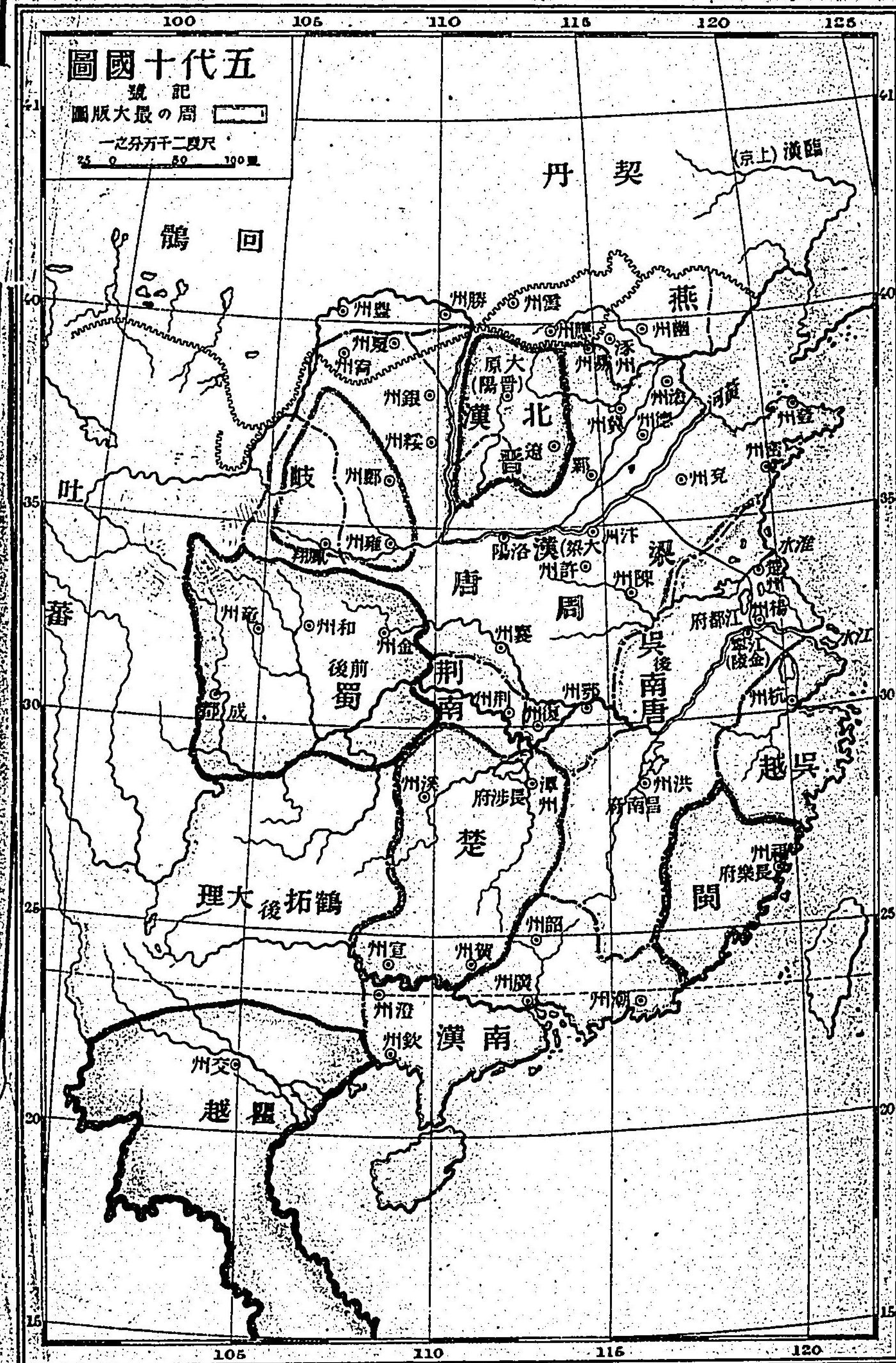
宋遼夏境域圖

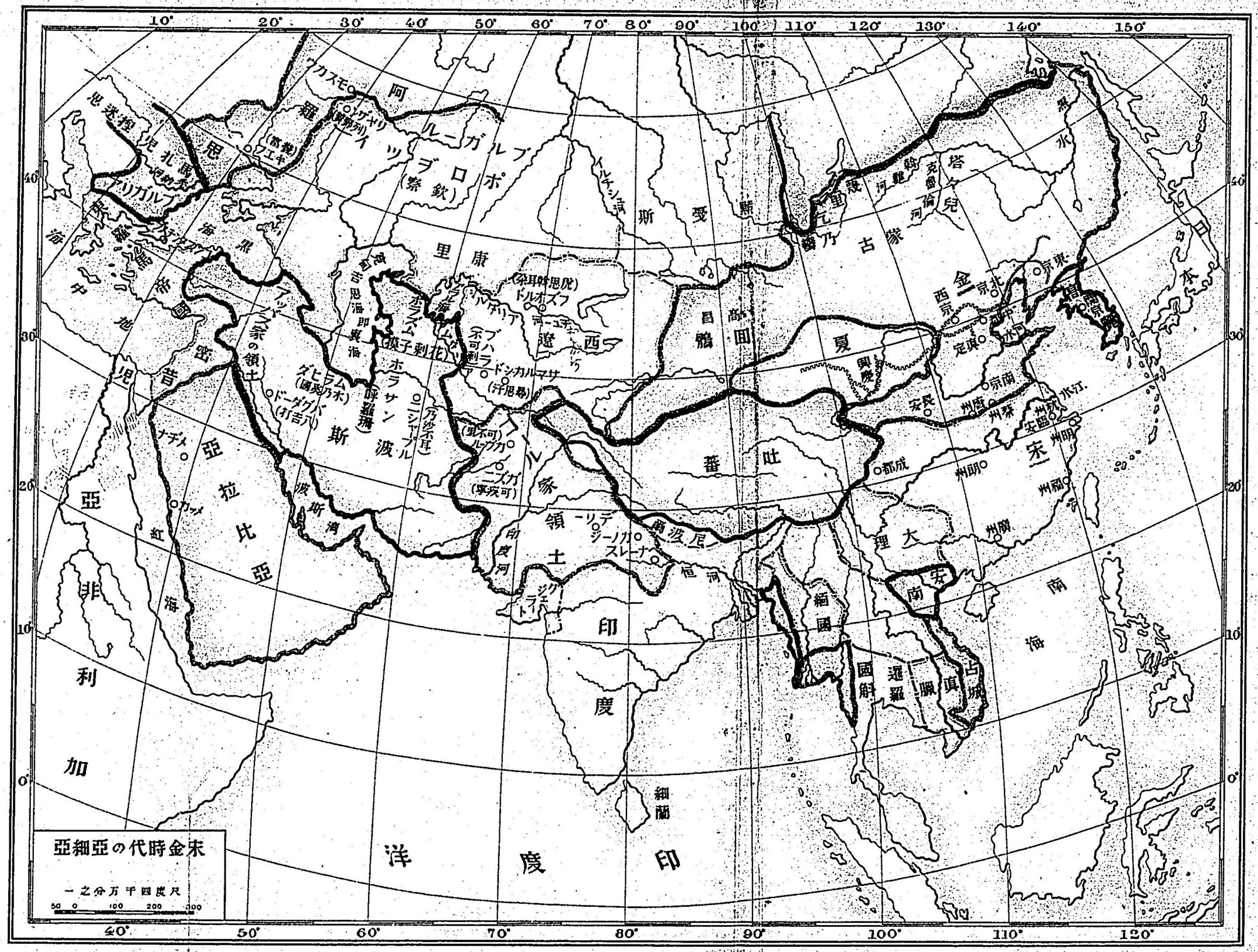
尺度二千万分之一

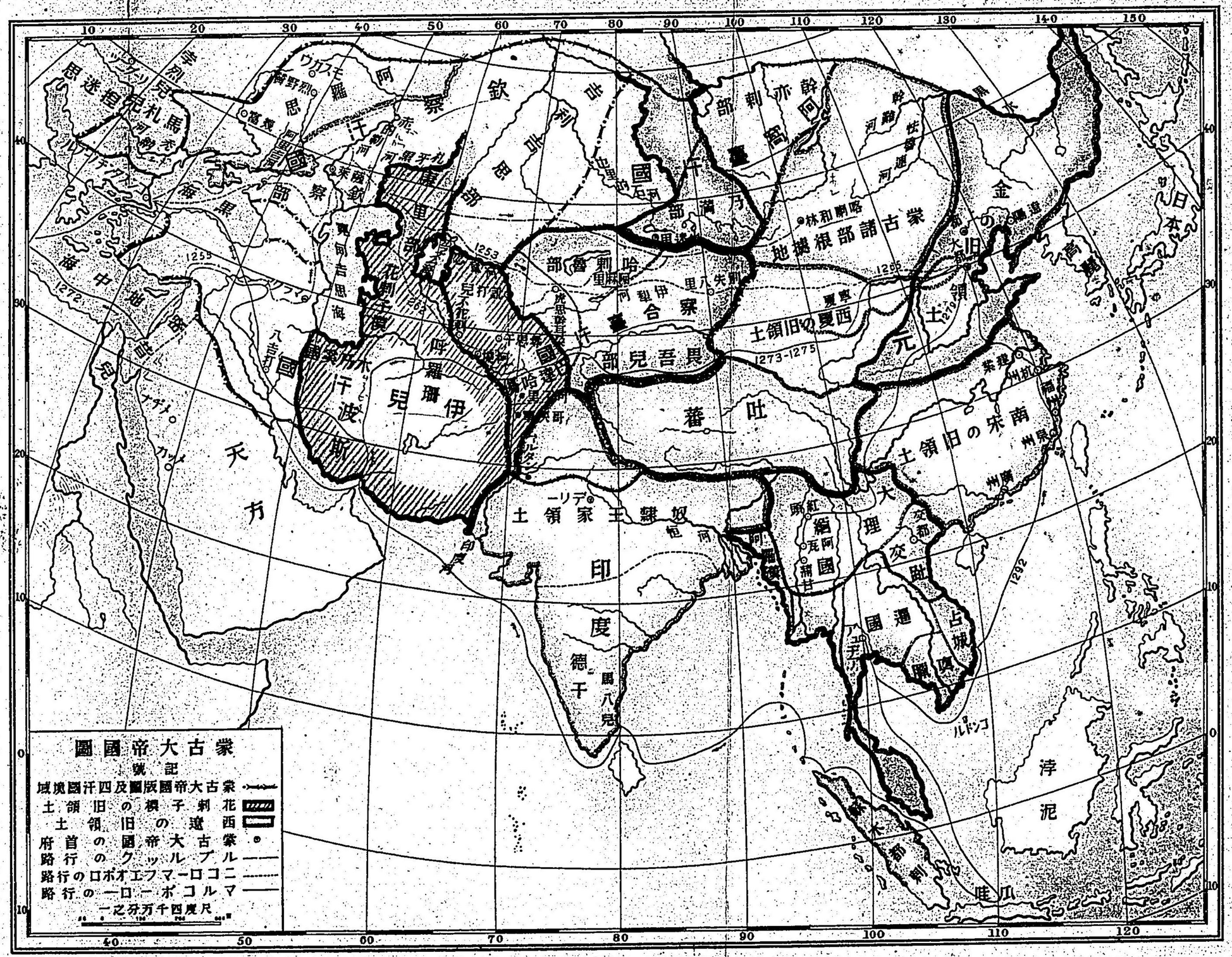

122
124
126
128
130
契丹
吉勿
卑鮮
城東遼
城內國
渾流水
城市安
都丸
麗勾高
馬蹄水
城平
湄水
北漢山
百濟
漢水
熊津
泗沘
白河口
新羅
城金
任那
那任
津島
伊豆
筑紫
圖立興濟百羅新麗勾高
號記
土領の麗勾高後亡滅那任
土領の羅新後亡滅那任
一之分万十七百六度尺
0 10 20 30 40 50

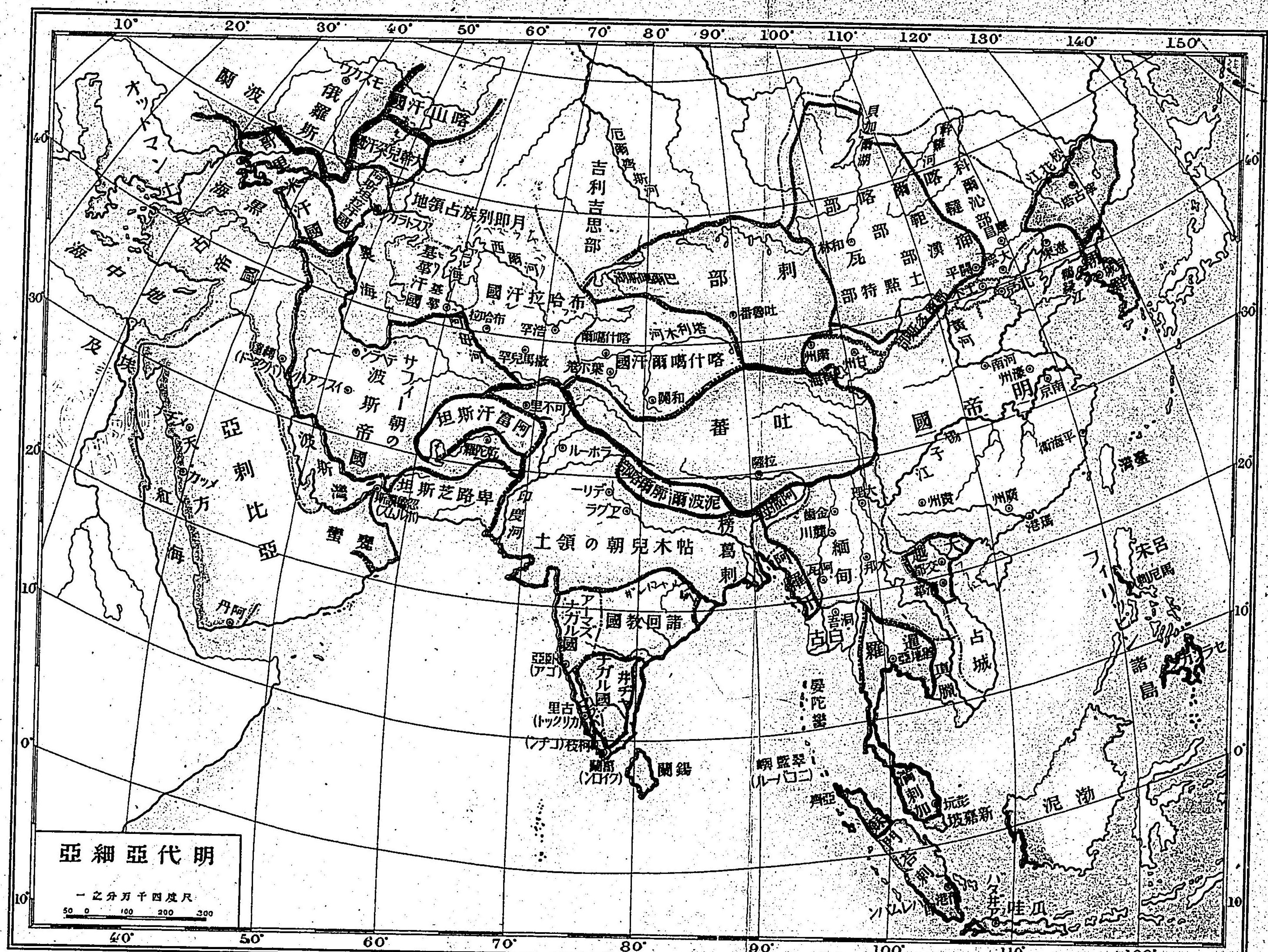


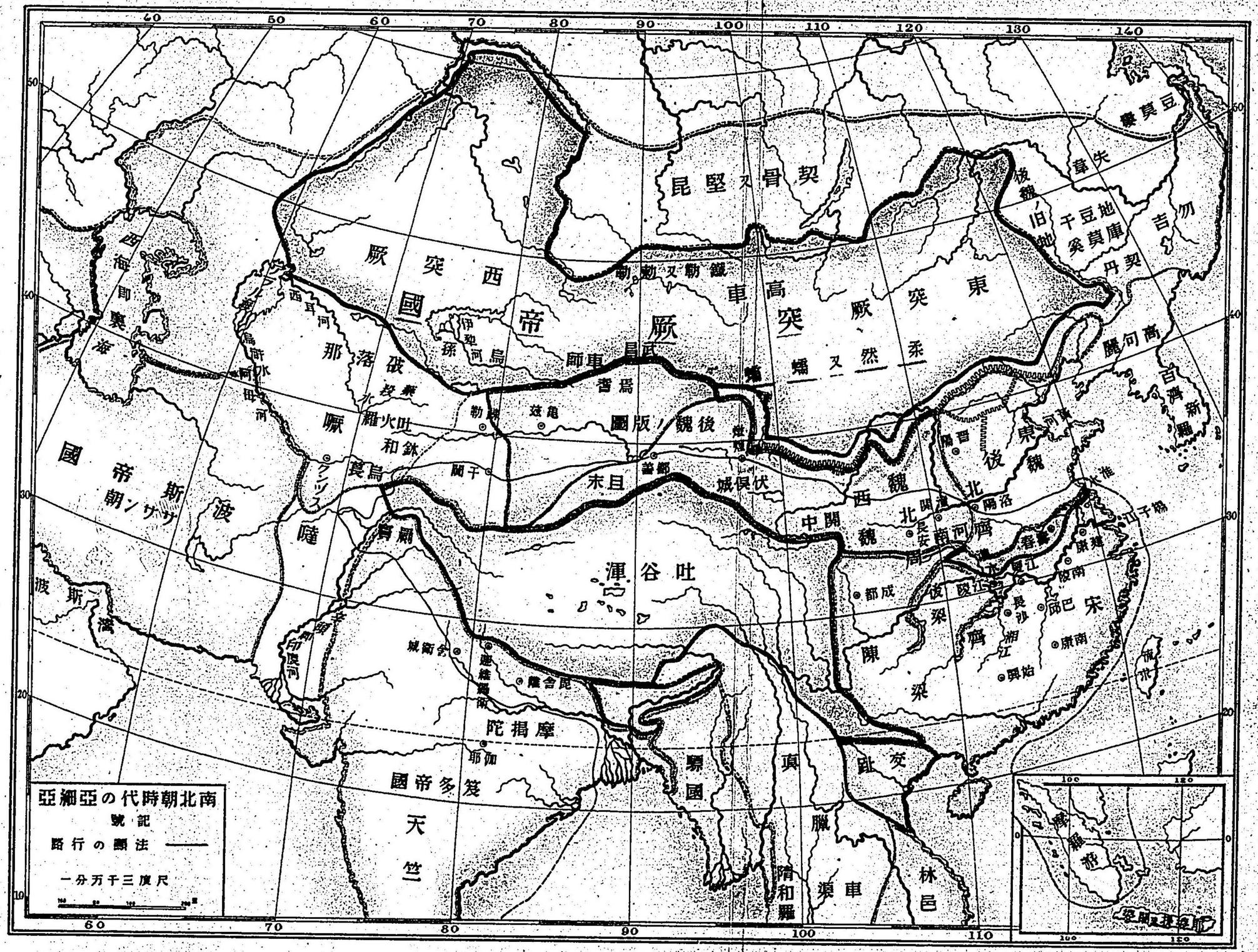
唐代亞細亞諸國圖
記號
唐の最大版圖
大食の最大版圖
吐蕃の最大版圖
南詔の最大版圖
回紇の最大版圖
六都護府所在地
玄奘の行路
尺度四千万分之一
印度洋
亞拉比亞海
南海
地中海
黑海
裏海
波斯灣


五代十國圖
記號
周の最大版圖
尺度二千万分之一
契丹
回鶻
吐蕃
燕
北漢
岐
漢
唐
周
梁
前蜀
後蜀
荊南
南唐
吳越
楚
閩
南漢
大理


亞細亞の代時金宋
一之分万千四度尺
50 0 100 200 300
10° 20° 30° 40° 50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120° 130° 140° 150°
40° 30° 20° 10° 0°
50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120°
阿
羅
斯
ルーガルブ
ツヴロポ
(祭欽)
ルチン河
斯
受
黑
里
康
(朵耳叶思尻)
ドルオズフ
河ーユチ
ブハラ
(不可剌)
ドシカルマサ
(汗思馬)
ホラズム
(眞子剌花)
ホラサン波斯
(呼羅舞)
ニシャプル
(乃沙不耳)
ダヒラム
(國民力木)
ドーダグド
(打吉八)
吉思海即裏海
ブカスモ
ゲヤリ
(新勢列)
(高麗)
フエキ
思迷拙
兒北魔
(新勢)
ルーガルブ
黑海
黑海
地中海
帝國
密
昔
兒
亞
拉
比
亞
ナヂメ
カッメ
紅海
非
利
加
ムスリム家の領土
波斯灣
ハルム家
領土
ーリデ
ジーノカ
スレーナ
ニズカ
(寧疾可)
ルーカ
(亞不可)
ジグラット
印度河
恒河
印
度
洋
印度洋
細蘭
緬國
暹羅
國解
眞腦
占城
安南
南海
大理
宋
州明
州福
州廣
州杭
安臨
水江
州泰
州度
京南
定眞
水中
京北
京東
西京
金
興慶
夏
安長
都成
吐番
高昌
鶻回
遼
西
元
蒙古
兒今
河倫
河龍
克魯
塔
黑水
日本


蒙古大帝國圖
號記
蒙古大帝國版圖及四汗國境域
花剌子模の旧領土
西遼の旧領土
蒙古大帝國の首府
クッルブルの路行
ロコニの路行
ロボエフマーロの路行
ポコルマーロの路行
一之分万千四度尺
日本
高麗
金の旧領土
元の旧領土
西夏の旧領土
蒙古諸部落根據地
林和剛喀
哈剌魯部
兒吾畏部
吐蕃
南宋の旧領土
大理
交趾
緬甸
印度
印度洋
天方
海中道路
黑海
思迷福兒馬札兒
阿剌亦部
阿剌亦幹
察合台汗國
欽察汗國
伊兒汗國
波斯
花剌子模
阿羅斯
土領家王
德干
馬八兒
爪哇
泥淖
都剌
1253
1255
1272
1273-1275
1292


波蘭
俄羅斯
オットマン土耳古帝國
黑海
地中海
埃及
亞剌比亞
紅海
波斯灣
サフィー朝の波斯帝國
阿富汗斯坦
卑路芝斯坦
帖木兒朝の領土
諸回教國
錫蘭
吐番
喀什噶爾汗國
布哈拉汗國
吉利吉思部
剌部
瓦剌部
韃靼部
明帝國
泥波羅
榜葛剌
緬甸
暹羅
占城
眞臘
滿剌加
渤泥
爪哇
呂宋
臺灣
フィリッピン諸島
尺度四千万分之一
50 0 100 200 300
明代亞細亞


南北朝時代の亞細亞
號記
路行の顯法
一分万千三度尺
突厥西帝國
突厥東帝國
高車
柔然又蠕蠕
昆堅又骨契
後魏
北魏
西魏
中間魏
後周
北周
南齊
梁
陳
宋
隋
和羅
車渠
交趾
林邑
真腊
驃國
摩揭陀
多羅國
天竺
波斯
波斯灣
吐谷渾
高句麗
百濟
新羅
倭
吉利
丹契
豆莫婁
失韋
旧地
千豆婁
庫莫奚
柔然
嚈噠
吐火羅
和鉢
烏孫
伊吾
高昌
龜茲
敦煌
善鄯
伏俱城
長安
洛陽
建康
廣州
成都
長沙
康南
興始
城衛舍
陸舍民
耶伽
西海
印度海
印度河
烏滸水
西耳河
那落破
烏孫
伊吾河
勒勒
敦煌
高句麗
百濟
新羅
倭
東京
河東
晉陽
長安
洛陽
建康
廣州
成都
長沙
康南
興始
江子嶺
淮水
揚州
春陵
夏江
湘江
陝南
陝江
渭水
黃河
長江
海水

明治卅四年八月十二日印刷
明治卅四年八月十五日發行

新撰東洋史奥附
（定價金八拾五錢）

著作者　坂本健一
同　高桑駒吉

發行者　東京市神田區裏神保町九番地
合資會社富山房
合資會社富山房社長
坂本嘉治馬

發行代表者　東京日本橋區樂研堀町三十三番地
仁科衛

印刷者　同所
印刷所　厚信舍
（電話浪花一四六番）

發兌元　（明治廿九年六月設立）合資會社富山房
長距離（電話本局加入（一〇三六番）電報略號ヤマフ

不許複製

所賣販書圖版出房山富 會合社家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

91
86

91
86
Ⓜ

003235−000−1

91−86

新撰東洋史

坂本　健一／著

M34

ACC−1518